宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ⅱ

- 一志郡三雲町上ノ庄所在遺跡の調査-

1 9 9 9 • 3

三重県埋蔵文化財センター

三重県のほぼ中央に位置します一志郡三雲町では、平成9年度に道路の改良 工事に伴い、たくさんの発掘調査が行われました。三雲町周辺の遺跡も発掘調査が行われ、当地の歴史は徐々に解明されつつあります。

宮ノ腰遺跡の調査は平成八年度に続いての第二次調査になります。昨年度の調査では弥生時代前期の遺物が見つかり、著名な中ノ庄遺跡の他にも三雲町内に弥生時代前期の遺跡が存在することが明らかになりました。古墳時代の流路からは多くの土器、木製品が出土し、当時の豊かな生活が明らかになりました。また、今回の調査では、平安時代末頃から室町時代にかけて当地に存在した曽祢庄に関係があると思われる集落の存在が明らかになりました。花押の墨書された陶器の椀が多く見つかり、中世の荘園の生活を知る上で貴重な資料と考えております。

発掘調査を行うことにより、いくつかの情報を得ることができます。しかし それと同時に貴重な遺跡は当地から姿を消してしまうことになります。報告書 という記録保存でしか資料を残すことはできませんが、当地の歴史を考える上 での手助けとなれば幸いです。

調査にあたりましては、地元の方々をはじめ、三雲町建設課、三雲町教育委員会、県土整備部道路整備課(旧 県土木部道路建設課)及び県津地方県民局久居建設部(旧 久居土木事務所)から多大な御協力と暖かい御配慮をいただきました。文末ではありますが、心から感謝申し上げます。

三重県埋蔵文化財センター 所長 大井 興生

例 言

- 1 本書は、三重県一志郡三雲町上ノ庄字宮ノ腰地内に所在する宮ノ腰(みやのこし)遺跡の第二 次発掘調査報告書である。
- 2 この発掘調査は、主要地方道松阪久居線緊急地方道路整備事業に伴い実施したものである。
- 3 宮ノ腰遺跡は、上記2の事業により、平成8年度にも発掘調査が行われている。そのため、書名を『宮ノ腰遺跡発掘調査報告書II』とする。
- 4 現地調査は平成9年度に行った。調査の体制は以下の通りである。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター (調査第一課)

主幹兼調查第一課長 吉水康夫 主查兼第二係長 前川嘉宏(調整)

技師 水谷 豊 主事 西出 孝

- 5 当報告書の作成は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課(平成9年度)、資料普及グループ(平成10年度)の協力を得た。遺構・遺物の写真は水谷と西出が撮影し、執筆及び全体の編集は水谷が行った。
- 6 調査にあたっては、三雲町在住の各位、三雲町役場、三雲町教育委員会、及び県土整備部道路 整備課(旧県土木部道路建設課)・県津地方県民局久居建設部(旧久居土木事務所)から多大な 協力を受けたことを明記する。
- 7 挿図の方位は、全て座標北で示している。当調査区は国土座標第VI系に相当する。なお、磁針方位は西偏6度20分、真北方位は西偏0度18分である。
- 8 挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り 縮尺不同である。
- 9 当報告書での用語は、以下の通り統一した。

つき………… 「坏」「杯」があるが、「杯」を用いた。

わん…………「椀」「碗」があるが、「椀」を用いた。

- 10 当報告書での遺構は、通番となっている。また番号の頭には、見た日の性格によって、以下の 略記号を付けた。
- SB:掘立柱建物 SD:溝 SE:井戸 SK:上坑 SZ:落ち込み pit.:ピット、柱穴 11 本書で報告した出土遺物や写真、図面等は当三重県埋蔵文化財センターにて保管している。
- 12 スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。 各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本 文 目 次

Ι .	前言…		(1)
1	調査	Eの契機	(1)
2	調査	6の経過	(1)
3	調査	Eの方法	(2)
4	遺跡	の名称について	(2)
II 1	位置と	環境	(3)
III	調査区	【の層位と遺構······	(9)
1	調査	E区の層位······	(9)
2	検出	¦した遺構······	(9)
	A 剪	5生時代の遺構	(9)
	В 🛱	□世前期の遺構	(9)
	C #	『世後期の遺構	(15)
IV :	遺物…		(20)
1	古代	は前の遺物	(20)
2	中世	:前期の遺物	(20)
3	中世	:後期の遺物	(21)
4	遺物	1包含層出土の遺物	(22)
5	木製	品	(22)
6	石製	品	(23)
7	金属	【製品 ····································	(23)
V	結語…		(38)
1	古代	は前の宮ノ腰遺跡について	(38)
2	中世	はの宮ノ腰遺跡について	(38)
3	墨書	山茶椀について	(39)
4	SE	10について	(39)
		网 馬 日 次	
		凶 ル 日 火	
図版.	. 1	調査区全景(南東から、北西から)、S B 57・58(北から)、	
		SB60・61周辺(東から)、SD50作業風景、土器出土状況(西から)	
図版	. 2	S E10 (1~4、西から)、S K51 (1・2、北から)	
図版	. 3	古代以前の土器、墨書山茶椀(1)	
図版	. 4	墨書山茶椀(2)	
図版	. 5	墨書山茶椀(3)、中世前期の土器(S D50) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
図版.	. 6	中世前期の土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図版	. 7	中世後期の土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図版	. 8	貿易陶磁器、鞴羽口、砥石、木製品	
図版.	. 9	木製品、刀	(49)

挿 図 目 次

第 1図	宮ノ腰遺跡周辺の遺跡位置図	(4)	第18図	SK20平面·断面図	(14)
第 2図	調査区周辺地形図	(5)	第19図	SD50土器出土状況図	(16)
第 3図	調査区位置図	(5)	第20図	SD52平面·断面図	(16)
第 4図	調査区西壁土層図	(6)	第21図	SE11平面・断面図	(17)
第 5図	調査区遺構平面図	(7 • 8)	第22図	SK14平面·断面図	(17)
第 6図	S B 57 • 58周辺図	(10)	第23図	SK15平面·断面図	(17)
第 7図	S B 59平面・断面図	(12)	第24図	SZ46平面•断面図	(17)
第 8図	SB60平面・断面図	(12)	第25図	古代以前の土器実測図	(23)
第 9図	S B61平面·断面図	(12)	第26図	SD50出土土器実測図	(24)
第10図	S B62平面·断面図	(12)	第27図	SD52ほか出土土器実測図	(25)
第11図	S B59~62周辺図	(12)	第28図	SE10、SK51ほか出土土器実測図	(26)
第12図	S E 10平面·断面図	(13)	第29図	ピット、SK15ほか出土土器実測	$\mathbf{Z}(27)$
第13図	S E 2 平面·断面図	(14)	第30図	SD37、SZ46出土土器実測図	(28)
第14図	S E 32平面・断面図	(14)	第31図	ピット、包含層出土遺物	(29)
第15図	S E 28平面·断面図	(14)	第32図	出土木製品実測図	(30)
第16図	S K51平面・断面図	(14)	第33図	出土石製品、金属製品実測図	(31)
第17図	S K26平面·断面図	(14)			
	身	曼	日	次	
	1	•	⊢- I	<i>y</i> (
₩ •					(10)
第1表					(18)
第2表					(19)
第3表					(31)
第4表					(32)
第5表	道物観祭表(2)	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •			(33)

 第6表 遺物観察表 (3)
 (34)

 第7表 遺物観察表 (4)
 (35)

第8表

I 前言

1 調査の契機

県道松阪久居線は、国道23号線の西方を並走する 交通路として機能している。とくに、三雲町や嬉野 町・松阪市北部に居住する人々にとっては、利用頻 度の極めて高い道路である。しかし、本線は旧集落 内を通るため、部分的に対向不可能な場所もあり、 随分な支障をきたしていた。そのため特に狭い道の 多い三雲町上ノ庄地内から嬉野町下竜王町地内にか けて、新たな路線が設けられることとなった。

そのことを受けて当埋蔵文化財センターで路線全線の遺物散布状況を調査したところ、三雲町上ノ庄字宮ノ腰地内と字北出地内において試掘調査が必要であると判断した。そのため平成7年11月に試掘調査を行ったところ、宮ノ腰地内2地区と北出地内2地区において発掘調査が必要であると判断した。

宮ノ腰遺跡の発掘調査は平成8年度に第一次調査 としてA地区の調査が行われている⁽¹⁾。今回の第二 次調査は、その北西隣のB地区の調査で実施した。

2 調査の経過

a 調査経過概要

第一次調査では、古墳時代前〜後期の河道、古墳 時代中期の竪穴住居、平安時代末頃の溝、戦国時代 の柱穴群等が見つかっている。第二次調査はその北 西にあたる。

調査は9月10日と11日に表土掘削を行った。しか し降雨により調査区が冠水したため、人力掘削を開 始できたのは24日からであった。この後も降雨の度 に調査区は水浸しとなり、排水に悩まされることと なった。調査は12月10日に終了し、最終的な調査面 積は1,700㎡であった。

調査は、作業員各位の熱意と暖かいご配慮により、 無事終了することができた。ここに御名前を記し、 心からの御礼を申し上げたい。

熱田 功、熱田仁至、井口大軌、加藤秀子、 雲切永子、瀬古カズ子、瀬古千明、田中 昭、 田中艶子、田中とし子、田中初子、田中満子、 中西公子、中西政子、中西喜代美、西川清一 西村達三、松島孝昭、松島広哲、平田正男、 平田光子、藤田豊子

なお、上ノ庄北出遺跡の発掘調査作業員からも多 大な協力を得た。あわせて感謝申し上げたい。

b 調查日誌(抄)

- 9月10日 南から表土掘削開始。
- 9月11日 表土掘削完了。北西調査区包含層から山 茶椀・土師器皿片が多く出土。
- 9月16日 宮ノ腰・上ノ庄北出遺跡の作業員へ遺跡 の説明を行う。しかし台風16号の影響で調 査区水没。作業は中止。
- 9月17日~22日 排水作業。
- 9月24日 作業開始。排水溝掘削、壁を清掃。
- 9月25日 北西調査区から包含層掘削開始。多量の 土師器皿片が出土するも、遺構は不明。
- 10月2日 北西調査区包含層掘削ほぼ終了。ピット 多数、井戸、溝を検出。
- 10月6日 遺構掘削開始。ピットは根石を持つもつ ものが多くみられる。調査区外までピット が続くことが予想されるため、拡張するこ ととする。
- 10月9日 北西調査区の遺構掘削完了。掘立柱建物 2棟ほど存在したと思われる(鎌倉時代)。
- 10月13日 南東調査区の遺構検出開始。南東端から始めるが、遺物少量あるのみで遺構は検出できず。
- 10月16日 北西調査区の拡張(重機掘削)。南東調査区では中央付近でピット、溝等検出。
- 10月17日 南東調査区のピット、溝の掘削。SD19 は埋土が粘土質のため、掘削に手間取る。
- 10月24日 今週は暑い日が続く。雨が少ないため、 掘削面にひび割れが目立つ。
- 10月29日 SD37の遺物出土状況を写真撮影。
- 10月30日 南東調査区の遺構掘削ほぼ完了。溝の掘削を行うが、遺物はほとんど含まず。
- 11月6日 拡張部の包含層掘削、遺構検出。溝2条 検出するが、うちSD50からは山茶椀が並 んだ状態で出土。

- 11月7日 遺構検出。ピットには根石を持つものがあり、掘立柱建物が続くようである。SK51から常滑の大甕が出土。
- 11月10日 S D 50、S K 51の写真撮影。大甕を取り 上げるが、下半分はなし。
- 11月13日 遺構掘削ほぼ完了。調査区の南東端から 清掃開始。
- 11月18日 全体写真撮影の予定だったが強風のため中止。午後から遺構実測に取りかかる。
- 11月19日 全体写真撮影。
- 11月20日 掘立柱建物の写真撮影。午後より遺構実 測。作業員は上ノ庄北出遺跡へ。
- 11月28日 遺構実測完了。
- 12月2日 井戸の完掘、ピットの立ち割りを行う。 同時に土層図の作成を行う。
- 12月5日 最後まで残ったSE10を完掘し、作業が 無事終了。
- 12月10日 完全撤収。
- 1月31日 三雲町に於いてスライド上映会「三雲町 と低地の遺跡たち」開催。(遺物展示は 2 月11日まで)
 - c 文化財保護法等にかかる諸通知。

文化財保護法(以下、「法」)等にかかる諸通知 は、以下により文化庁長官等あてに行っている。

- ・法第57条の3第1項(文化庁長官あて)
- 平成9年9月5日付 道建第940号
- ・法第98条の2第1項(文化庁長官あて)
- 平成9年度9月24日付教文1546号
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知(久居警察署長あて)
- 平成10年3月17日付教文第6-96号

3 調査の方法

a 小地区の設定について

今回の調査では、調査区内を4m四方の升目で切ることによって小地区を設定した。東から数字、南からアルファベットを付け、升目の南東隅の交点をその地区の符号とした。なお、この小地区設定は、国土座標軸とは無関係である。

b 遺構図面について

調査区の平面図は1/20で作成している。また、

井戸などの遺構は、個別に1/10の実測図を作成したものもある。

4 遺跡の名称について

宮ノ腰遺跡は、昭和47年度に「宮の越遺跡」という名称で試掘調査がなされ、古墳時代から鎌倉時代にかけての遺物が出土している[©]。また、周知の埋蔵文化財として「宮ノ越遺跡」として遺跡登録台帳に記述されている。しかし、現在の小字名が「宮ノ腰」であることから、第一次調査と同様に「宮ノ腰遺跡」とする。

註

- (1) 伊藤裕偉「宮ノ腰遺跡発掘調査報告 II」 (三重県 埋蔵文化財センター 1998年)
- (2) 吉水康夫「宮の越遺跡」(『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1973年)

II 位置と環境

宮ノ腰遺跡は、一志郡三雲町上ノ庄字宮ノ腰に所在する遺跡群である。西方約4kmの堀坂山山系から流れ出る岩内川と堀坂川に挟まれた標高約5mの沖積地に位置している。現在の上ノ庄の集落は、この遺跡の南部に当たる。

今回の調査区は、平成8年度に行われた宮ノ腰第一次調査⁽¹⁾の北西隣に位置する。現在はJR名松線が調査区の北を走り、上ノ庄駅が調査区の東に所在する。今年度は岩内川を挟んだ北西の上ノ庄北出遺跡でも発掘調査が行われた⁽²⁾。

今年度、三雲町周辺では多くの遺跡の発掘調査が 行われた。周辺の歴史的環境については第一次調査 や、これらに詳しく述べられているため、今回は当 遺跡に関連することを中心に述べていきたい。

宮ノ腰遺跡第一次調査においては、遺構は見られなかったものの、弥生時代前期の壺と甕が出土している。当遺跡の北東約3kmには、弥生時代前期の集落跡である中ノ庄遺跡®が所在している。おそらく、当遺跡周辺には、さらに前期に属する遺跡が存在するのであろう。

古墳時代前・中期では、宮ノ腰遺跡第一次調査で河道、竪穴住居が確認され、多くの土器や木製品が出土している。また、同じ上ノ庄に所在する上ノ庄北出遺跡からも中期の溝や土坑、遺物が見つかっている。当遺跡の周辺に同時期の集落が存在するのであろう。周辺には、嬉野町上野、松阪市小野にかけて向山古墳⁽⁴⁾、同市深長町深長古墳⁽⁶⁾などの前期古墳がある。当遺跡北東の貝塚遺跡⁽⁶⁾では、古墳時代前期の集落が見つかっており、周辺の平野部には同時期の集落が広がっていたことが伺える。

古墳時代後期では、先述の中ノ庄遺跡で、円墳が 確認されている。当遺跡上流の松阪市美濃田町には 美濃田古墳群が形成され、さらに上流の山麓部には 数多くの群集墳が形成されている。

当遺跡周辺で人々の生活が再び盛んになってくるのは、平安時代末頃になってからである。平安時代末から室町時代にかけては当地域に「曽袮荘」という荘園があったことが知られている[®]。『醍醐寺文

書』貞和3 (1347) 年9月4日付、曽袮荘百姓等請文[®]には、「下郷寂蓮、上郷円勝、久米郷右馬充」と見え、「下郷」は「市場ノ庄」(近世には「下ノ庄」と呼ばれていた)、「上郷」は「上ノ庄」、「久米郷」は「久米」と考えられる。したがって、宮ノ腰遺跡自体も曽袮荘に含まれていた可能性がある。

曽袮荘の成立は古く、9世紀後半の資料にまでさかのぼる®。当初は朱雀院御領であったが、天暦 2 (948) 年に醍醐寺領となり、戦国時代頃まで継続する。現在の松阪市松崎浦も含んで経済的に豊かだった曽袮荘は、時とともにさまざまな勢力が実権を握っている。12世紀には伊勢平氏の拠点の一つとなり、平信兼の居住地となっている。鎌倉時代には醍醐寺の本所一円地として機能しており、橘氏が公文職となっている。

三雲町周辺には曽袮荘のほかにも多くの荘園が所在していた。三雲町には、昭慶門院領「蘇原御厨」 (現曽原)や、神宮領「甚目御園」等がある。また 松阪市船江町周辺には近衛家領「船江荘」、久居市 木造町には「木造荘」、嬉野町須賀から須賀領あたりには「須可荘」、同町黒野には外宮領「黒野御厨」 等の荘園が知られている。

南北朝の合一の頃から、曽袮荘は北畠氏の支配を 受けるようになっていく。当遺跡周辺には北畠氏が 築いた城館も多く存在しており、曽袮荘も北畠氏の 勢力を支える経済的な基盤のひとつとして存在した のであろう。

註

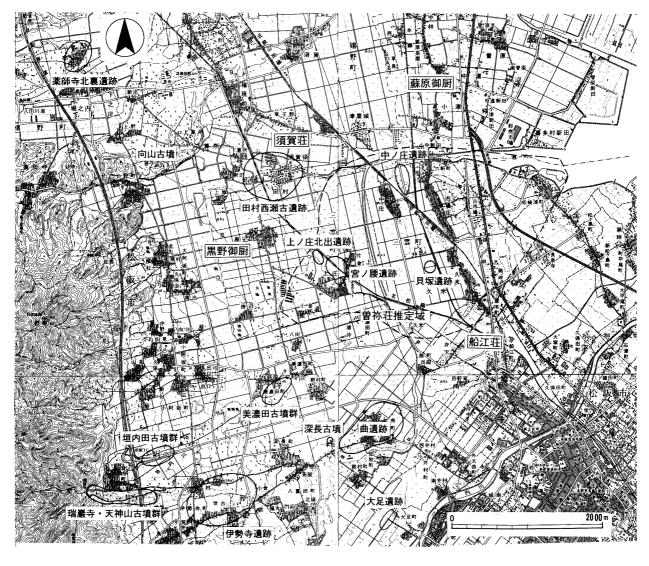
- (1) 伊藤裕偉『宮ノ腰遺跡発掘調査報告 I 』(三重県 埋蔵文化財センター 1996年)
- (2) 山本義浩『上ノ庄北出遺跡発掘調査報告』(三重 県埋蔵文化財センター 1998年)
- (3) 谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』(三重県教育委員会 1972年)
- (4) 『松阪市史第2巻史料編考古』1978年
- (5) 增田安生「深長古墳」(『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊

重県埋蔵文化財センター 1987年)

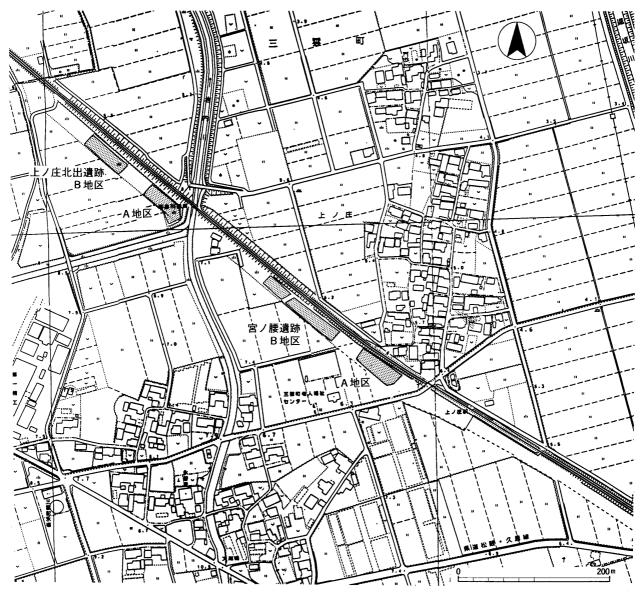
- (6) 伊藤克幸「貝塚遺跡」(『昭和51年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1977年)
- (7) 曽袮庄については、以下の文献を参考とした。

小林秀「醍醐寺領曽袮荘」(『ふるさと三雲今と昔』 三雲町史編纂委員会 1996年)

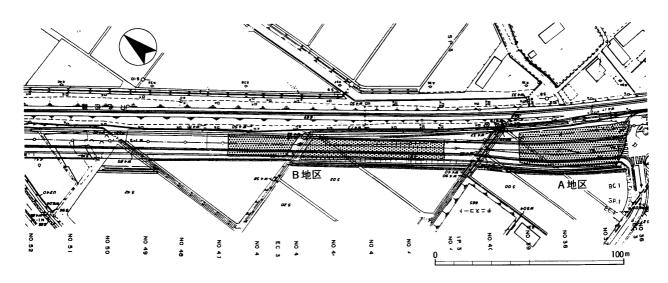
清水正健編(『荘園資料』上巻 角川書店 1978年) 稲本紀昭「伊勢国」(『講座日本荘園史』 6 吉川弘 文館 1993年)



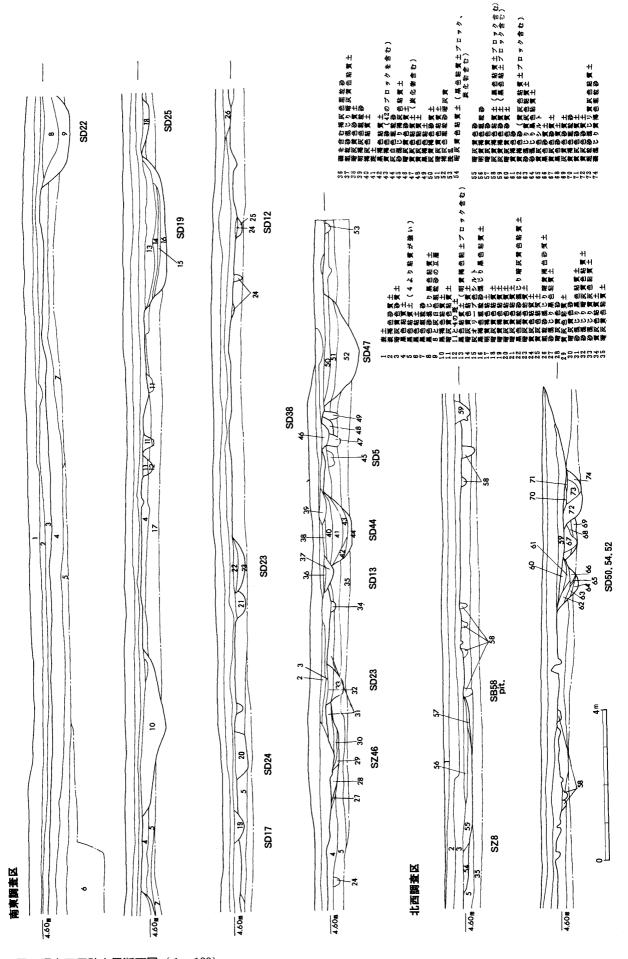
第1図 宮ノ腰遺跡周辺の遺跡位置図(1:50,000 国土地理院1/25,000「松阪」「大河内」「天仰」「松阪港」より)



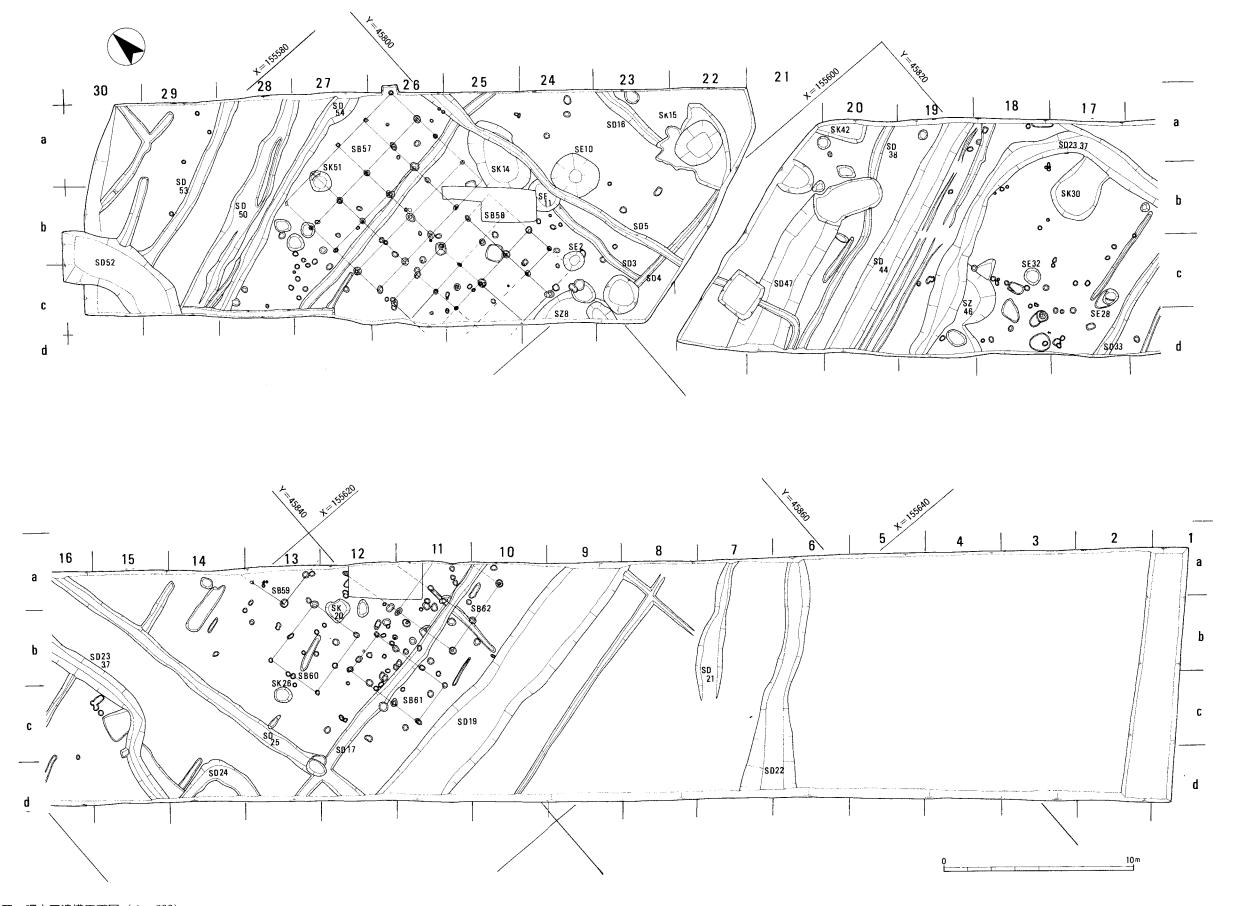
第2図 調査区周辺地形図 (1:5,000)



第3図 調査区位置図 (1:2,000)



第4図 調査区西壁土層断面図 (1:100)



第5図 調査区遺構平面図 (1:200)

Ⅲ 調査区の層位と遺構

1 調査区の層位

調査区周辺は、調査前の標高で約5mの低地に位置し、すでに圃場整備事業が完了している。調査区は、現在も使用されている排水溝によって2地区に分かれている。しかし基本的な層位は同様である。

遺跡の基盤層は黒色土である。この黒色土は南東にいくほど厚くなり、調査区の南端では標高約3.0 mまで掘り下げたが、黒色土より下の土層を確認することはできなかった。この黒色土はいわゆる「黒ボク」であり、遺跡形成以前の旧流路により堆積したものであろう。黒色土からは若干の弥生時代後期の遺物が出土しているが、検出した遺構は流路のみであり、その流路からは、若干の弥生土器の小破片が見られたのみである。

調査区の一部では黒色土の堆積が見られず、青灰 色系の砂質土や黄褐色粘土が基盤となるところもあ る。これらは、前者が上ノ庄北出遺跡A地区で、後 者が同B地区と嬉野町田村西瀬古遺跡で、それぞれ 遺構検出面となっており、同様のものと考えられる。 当地域の本来の基盤は黄褐色の粘土で、流路による 堆積によって青灰色系の砂質土と黒ボクが堆積した と思われる。今回の調査で確認された遺構は、主に 平安時代末から室町時代(以下、「中世」と呼称) に属する。第1次調査で見られたような古墳時代の 流路は確認できなかった。これは黒色土の堆積によ り、当調査区が微高地化していたためだと考えられ る。

中世遺構の埋土は灰褐色系の砂質土であり、遺物 包含層となる。中世遺構は調査区南部の黒色土の堆 積の厚いところには全く見られず、このような地点 は居住に適さなかったものと思われる。

中世の遺構面は標高約4.5mで検出できた。しかし、根石が検出面で見られるところもあることから、本来の生活面はより高かったものと思われる。

2 検出した遺構

今回の調査で確認できた遺構は、中世の掘立柱建 物や井戸・土坑・溝・ピット等である。ここでは主 な遺構について記述する。その他については遺構一 覧表を参照されたい。

A 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構としては、流路と思われるものを 南西調査区の南側で2条検出した。埋土はいずれも 黒色の粗粒砂である。わずかに弥生土器の小破片が 出土したのみである。

B 中世前期の遺構

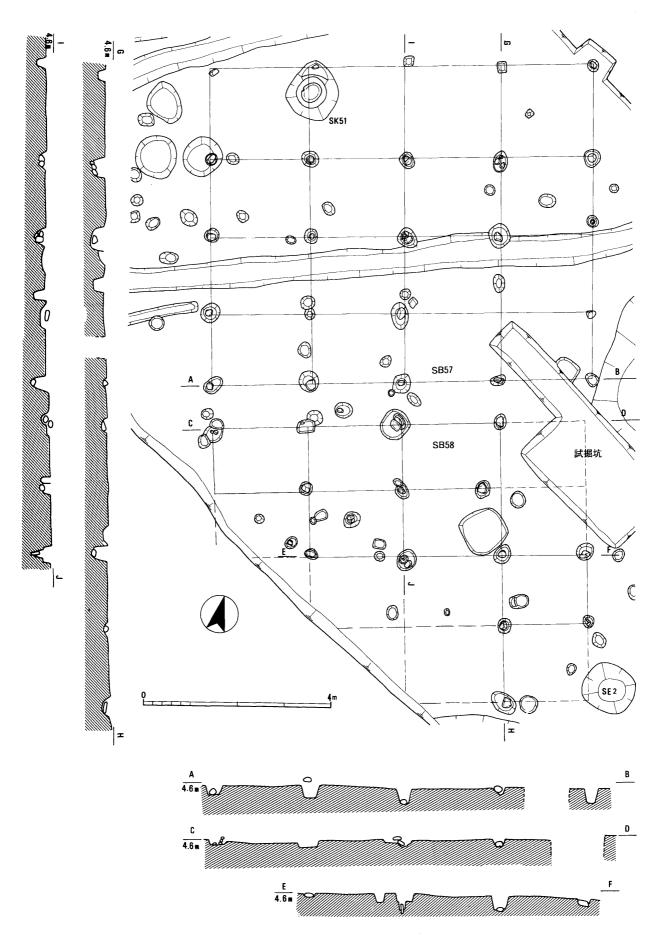
中世前期とはおよそ鎌倉時代を意味し、平安時代 末から14世紀中葉までをこの範疇とした。今回の調 査の中心となる時代であり、掘立柱建物や井戸・土 坑・溝・根石を持つピット等、多くの遺構が見つかっ ている。

(1) 掘立柱建物

当調査区では、根石を持つピットが多く見つかっている。特に北西調査区の中央付近と南東調査区の中央付近に集中している。したがってさらに数棟の建物が存在する可能性はあるが、6棟の建物を確認した。ピットからの出土遺物が少ないために確実な時期は不明確であるが、他の遺構との関係から13世紀前葉の遺構と考えられる。

SB57 北西調査区に位置する南北4間(南より 1.5m、1.7m×2、2.0m)、東西4間(2.0m×4)の総柱の掘立柱建物である。南北それぞれの柱列は 厢になると考えられる。北の柱列はSD54と近接しているため、溝埋没後に拡張されたとも考えられる。ほとんどのピット内に根石が見られる。北端・西から2番目のピットはSK51を切っているか、あるいは同時期のものであるが、切り合い関係は不明である。ピット内より完形の土師器小皿が出土しており、13世紀前葉の遺構と考えられる。

S B 58 S B 57の南に隣接する南北4間(1.4m × 2、1.6m×2)、東西4間以上(東より1.8m、2.0m×3)の総柱の掘立柱建物である。東側の柱列が試掘坑で切られ、西側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、西に更に伸びる可能性



第6図 SB57・58 平面・断面図 (1:80)

もある。ほとんどのピットに根石が見られる。ピット内から出土遺物はほとんど見られないが、S B57と隣接し、ほぼ棟方向を揃えていることから、同時期の建物と考えられる。

S B 59 南東調査区のほぼ中央に位置する遺構である。調査区の端に位置するためピットは3ヵ所しか確認されていないが、周辺の他の建物と同じ方向を向いているため、掘立柱建物になる可能性が高いと思われる。柱間はともに約2.0mであり、南北のピットにはそれぞれ根石が見られる。

SB60 南東調査区のほぼ中央に位置する南北2間(1.4m×2)、東西2間(東より1.6m、1.8m)の掘立柱建物である。東側のピットが13世紀後葉と考えられる古瀬戸の花瓶が出土したSK20に切られており、13世紀前葉の溝SD19と同じ方向を向いていることから、13世紀前葉の建物と考えられる。ピットに根石は見られない。

SB61 SB60の南に位置する南北3間(北より1.5m、1.6m×2)、東西2間(1.2m×2)の掘立柱建物である。SB59と方向を揃えており、13世紀前葉の遺構と考えられる。

SB62 SB61の東に位置するが、大半が試掘坑と調査区外にあり、正確な規模は不明である。調査区内では南北4間(南より1.8m×2、2間で3.4m)以上、東西2間(西より1.8m、2.4m)以上の掘立柱建物である。東西の柱間が不統一であることから、西側の柱列は庇か栅になる可能性が考えられる。14世紀後葉と考えられるSD17に切られており、SB60・61等と方向を揃えているため、13世紀前葉の遺構と考えられる。

(2) 井戸

今回の調査区からは、中世前期の井戸として、井戸枠を持つ13世紀前葉の井戸1基、井戸枠を持たない13世紀後葉~14世紀前葉の井戸2基を確認している。

SE10 北西調査区の南東部、SB57・58の東に位置する。直径約2.4mの円形の掘形に、残存最大長約0.9mの板材を13枚使用して作られた径約0.7mの外枠と、残存最大長0.7mの板材を9枚使用した径約0.5mの結桶を持つ。結桶は板材の先端を鋭利に加工し、青灰色泥岩層に打ち付けられ、楔と2条

の竹製の箍で固定されていた。桶の底部は、標高約2.7mに達している。結桶の中から刀や花押の墨書された山茶椀・土師器小皿・木製品等が出土しており、13世紀前葉の遺構と考えられる。SB57・58と同時期に使用されていたと思われる。

SE32 南東調査区の北西部で確認した遺構である。直径約0.8mの堀形を持つが、井戸枠等は見られなかった。底の標高は約3.8mである。絶えず水がわいているため、漆の椀やしゃもじが残存していた。南伊勢系の土師器鍋が出土しており、13世紀後葉のものと考えられる。

SE2 北西調査区の南部、SB58の南に位置する。直径約1.2mの円形の堀形を持ち、底の標高は約3.3mである。井戸枠等は見られなかった。底近くより常滑産の壺が2点出土しており、14世紀前葉の遺構と考えられる。

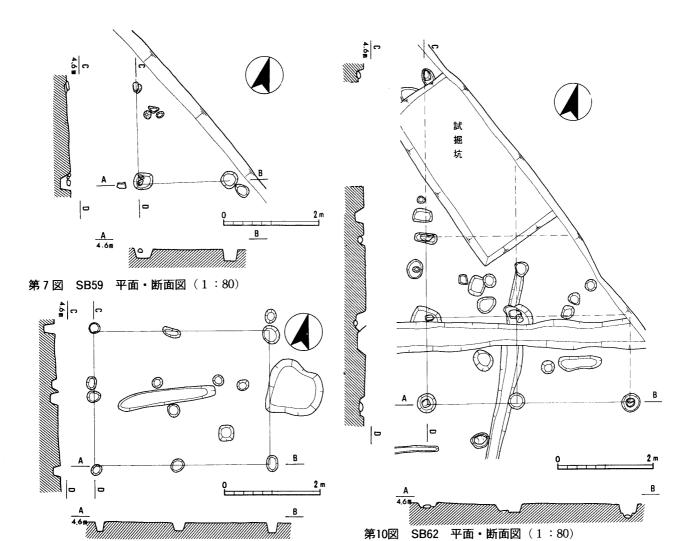
SE28 南東調査区の北側に位置する1.4×0.8m の楕円形の遺構である。西側にテラス部を持ち、直径約0.7mの円形で更に深くなり、底の標高は約3.8 mである。この地点で水が湧いてきており、井戸と考えられるが、井戸枠等は見られなかった。遺物はほとんど見られず、時期は不明である。

(3) 土坑

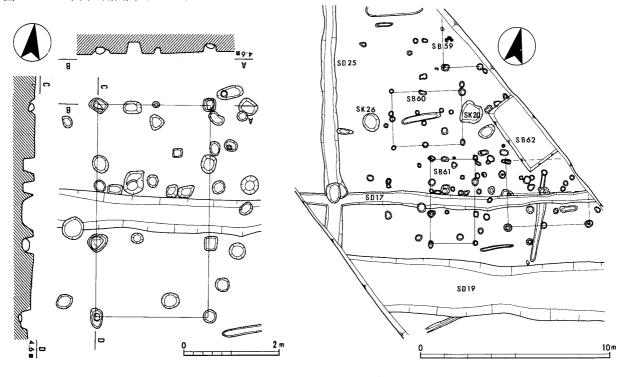
中世前期に属すると考えられる土坑は、出土遺物 が少なく、山茶椀や土師器皿の破片が見られる程度 である。

S K51 S B57の建物内にあり、建物に伴うと考えられる遺構である。土坑内には12世紀中頃に常滑で作られた大甕が、下半分を割られた状態で正立で据えられていた。埋土からは13世紀前葉の山茶椀や土師器が出土しており、大甕も使用された後、13世紀前葉に埋められたものと考えられる。甕の中からは特に何も出土していない。性格は不明であるが、下半分を割ってものが残らないようにしていることなどから、便所として使用された可能性も考えたい。

S K 26 南東調査区のほぼ中央、S B 59の西に位置する遺構である。掘形は直径0.9mの円形で、底は標高約3.8mである。井戸の可能性も考えられるが、井戸枠等は見られなかった。遺物はほとんど出土しておらず正確な時期は不明であるが、周りの建物と同じく13世紀前葉の遺構と思われる。

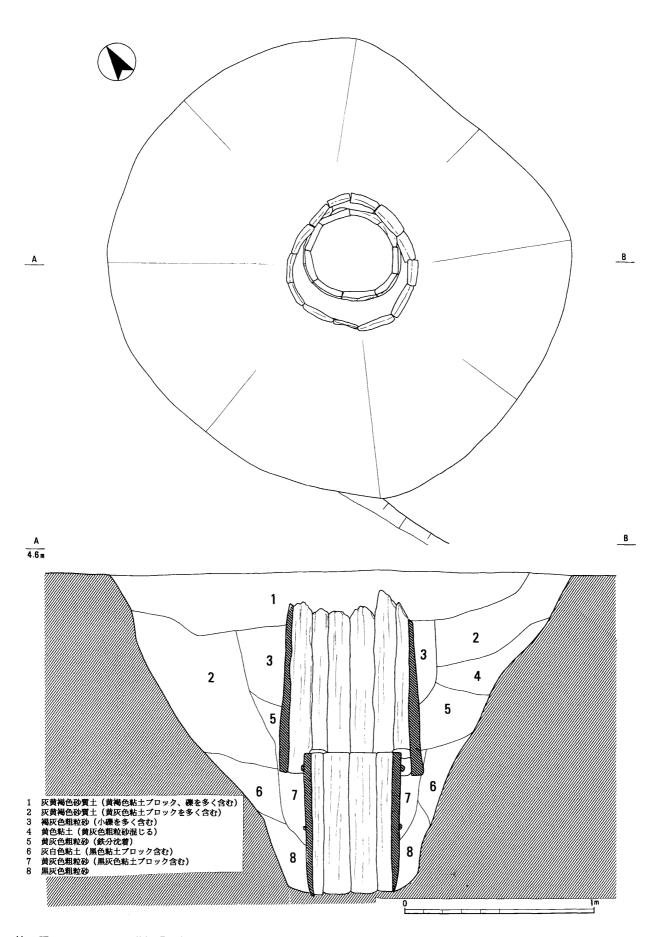


第8図 SB60 平面・断面図(1:80)

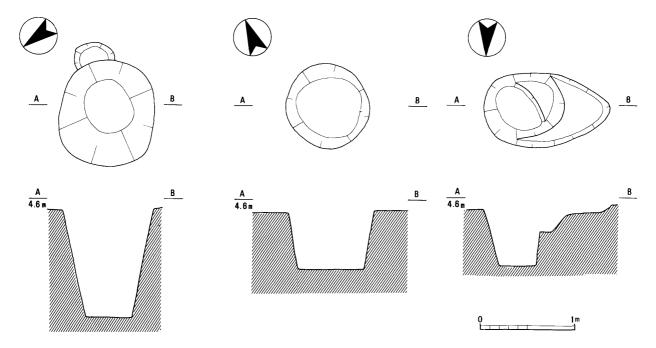


第9図 SB61 平面・断面図(1:80)

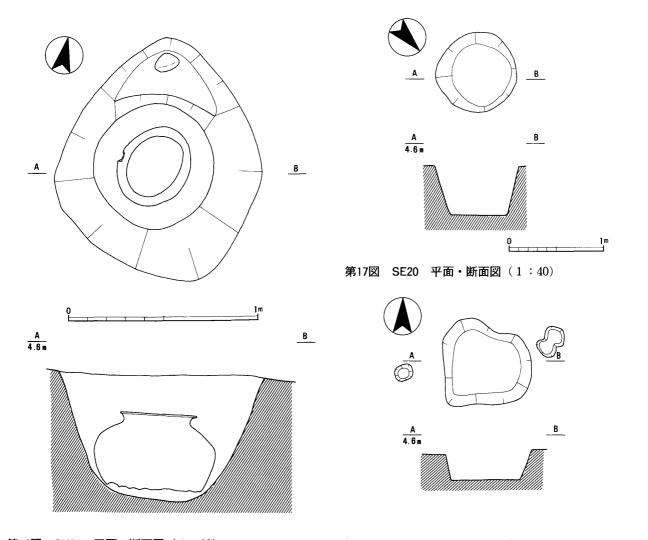
第11図 SB59~62 周辺図(1:200)



第12図 SE10 平面・断面図 (1:20)



第13図 SE 2 平面・断面図(1:40) 第14図 SE32 平面・断面図(1:40) 第15図 SE28 平面・断面図(1:40)



第16図 SK51 平面・断面図 (1:20)

第18図 SK20 平面・断面図 (1:40)

SK20 SB59の東に位置する約1.2m程の不整形の土坑である。深さは検出面より約0.3mで、断面は台形である。SB59のピットを切っており、建物よりは新しい遺構である。底部から13世紀後葉のものと思われる古瀬戸の花瓶が出土しており、その頃の遺構と思われる。

(4) 溝

SD19 南東調査区のほぼ中央を東西に走る幅約3.0m、深さ約0.5mの断面台形の溝である。埋土は粘性が強く、上層部は斑土状になっており、最終的には意図的に埋められたものと考えられる。遺物は少ないが、斑土層の下より山茶椀や土師器皿の破片が出土しており、13世紀前葉には溝として機能していたと考えられる。またこの溝より南には中世の遺構はまったく見られない。第一次調査の北部でも中世の遺構は確認されておらず、溝の規模からいっても当時の集落全体を区画する溝であった可能性が考えられる。

SD44 47 南東調査区の北部を東西に平行して走る溝である。SD44は幅約1.5m、深さ約0.6mの断面台形の溝、SD47は幅約2.4m、深さ約0.8mの断面台形の溝である。出土遺物は少ないものの、13世紀前葉の山茶椀が出土している。2条でSB57・58を中心とする集落域を区画する溝として機能していたと考えられる。SD47は試掘坑にあたるためはっきりしないものの途中で途切れており、大部分が調査区外になるため可能性としてしかいえないが、SK42がSD47に続く溝となり、入り口として機能していた可能性が考えられる。

SD50 54 北西調査区の北部、SB57の北を東西に重なりながら、ほぼ平行して走る溝である。SD50は幅約1.5m・深さ約0.4m、SD54は幅約0.6m・深さ約0.3mの、共に断面U字形の溝である。SD54はSD50と同じ溝と考えていたため、出土遺物は不明である。検出の際にSD50の上層で遺物が並んで出土しており、その中には墨書された山茶椀も多く見られる。遺物が上層に見られることから、13世紀前葉に埋没したものと考えられる。

S D 52 北西調査区の北端を南北に走る幅2.5m、深さ約0.8mの溝である。溝底から絶えず水が湧くため、杭や底の確認はできていない。時期的には12

世紀後葉~13世紀前葉の遺物と、15世紀後葉の遺物が見られ、何回かにわたって掘り直されていると思われる。溝の底には杭が打ちつけられていたが、15世紀後葉以降のものであろう。

SD23 南東調査区の北部を弧状にめぐる溝である。この溝は15世紀後半に掘り返されており、13世紀前葉に属する遺物を含む褐色砂質土をSD23とした。幅約1.5m、深さ約0.4mである。何かを区画する溝とも考えられるが、内側からは井戸2基とピットを検出したのみであり、建物としてまとめることはできなかった。

SD38 南西調査区の北部、SD44・47の間を東西に走る幅約0.5m、深さ約0.2mの遺構である。埋土から鞴羽口が2点出土している。今回の調査区からは工房跡と思われるような遺構は検出されなかったが、包含層から若干の鉄滓が出土しており、調査区近辺に工房跡が存在していたと思われる。遺物が少なく明確な時期は不明であるが、13世紀前葉の山茶椀、14世紀中葉の土師器皿等の遺物が見られる。

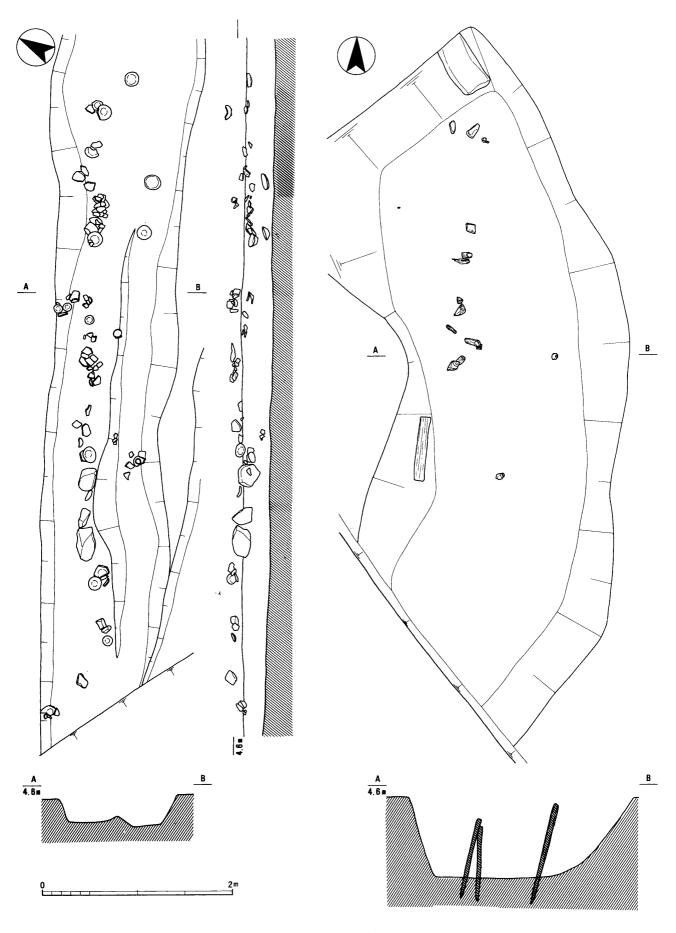
C 中世後期の遺構

南北朝時代〜室町時代前期(14世紀中葉〜16世紀 前半)の遺構である。中世前期と比べると遺構は少なく、井戸、土坑、溝を検出した。15世紀後葉の遺物を含み、根石を持つピットもいくつか見られるものの、建物としてまとめることはできなかった。

SE11 北西調査区のほぼ中央に位置する遺構である。溝と試掘坑によって切られているためはっきりとしないが、約1.6mの円形の掘形を持つと思われる。底は標高約2.4mである。木枠等は確認できなかった。

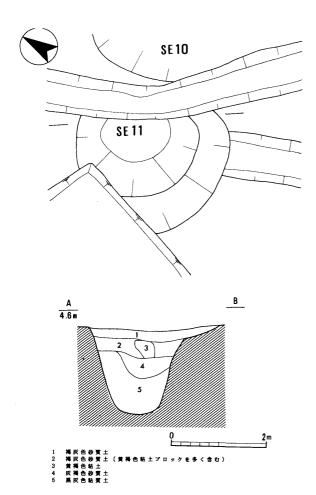
SK14 北西調査区のほぼ中央に位置する落ち込みである。埋土は青灰色シルトと、黄灰色砂質土の互層になっており、葉や枝などの植物遺体が多く含まれていた。形も不定形のため自然の落ち込みと考えられる。14世紀後葉以降の遺物が出土している。

SK15 北西調査区の西部に位置する不定形の落ち込みである。埋土は青灰色シルトと灰色砂質土の互層になっており、葉や枝などの植物遺体が多く含まれていた。上層には40cmほどの石が多く見られ、遺物も大半が上層からの出土である。15世紀前葉の

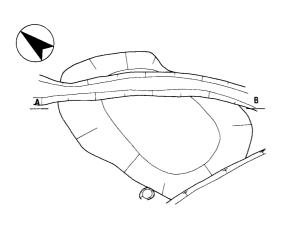


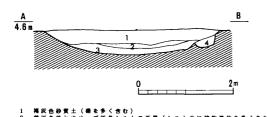
第19図 SD50 土器出土状況(1:40)

第20図 SD52 実測図 (1:40)

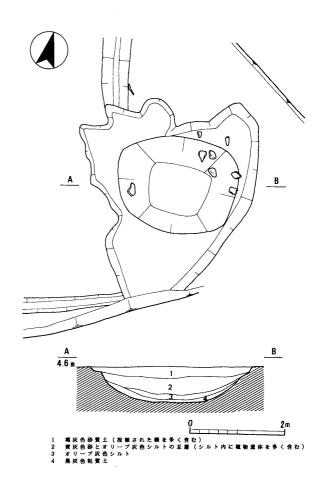


第21図 SE11 平面·断面図 (1:80)

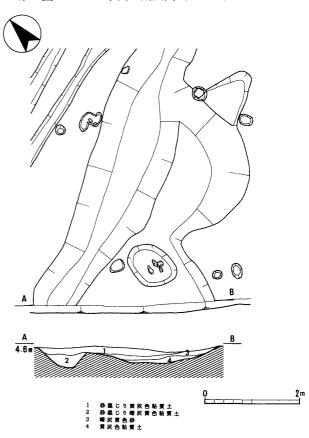




第22図 SK14 平面・断面図 (1:80)



第23図 SK15 平面·断面図(1:80)



第24図 SZ46 平面·断面図 (1:80)

遺物も見られるが、15世紀後葉に埋没したと考えられる。

S Z 46 南西調査区のほぼ中央西端に位置する。 灰色粗砂が不定形に広がっており、S D37の流出に よって作られた自然の落ち込みであると思われる。 4 段階の鍋が多く見られ、15世紀後葉のものと思わ れる。

S D 37 南西調査区の西部を弧状にめぐる溝である。S D 23と重なっており、掘り直されたものである。上層から南伊勢系4段階の土師器鍋が出土しており、15世紀後葉の遺構であると思われる。

S D17 25 南西調査区のほぼ中央を走る溝である。両者は直角に交わるが、切り合い関係は不明であり、同時期の溝と考えられる。区画溝としての使用が考えられるが、S D19と同じ方向のためどの建

物を区画しているかは明確ではない。可能性としては切り合いも持たないSB58・59が考えられる。出土遺物から14世紀後葉から15世紀前葉の遺構と考えられる。

S D 24 南西調査区のほぼ中央、西端で検出した 遺構である。一部が調査区にかかるのみであるため 性格等は不明であるが、調査区内で直角に曲がるた め、区画溝の可能性も考えられる。15世紀後葉の遺 構と考えられる。

小地区 d-16 p. 1 南西調査区の西側に位置する遺構である。調査区の西端に位置し、周りに他の柱穴が見られないため性格は不明であるが、SD23・37に囲まれた建物の北東端の柱穴の可能性もある。土師器皿が4枚重なって出土しており、14世紀後葉の遺構と考えられる。

遺構番号	棟方向	規模	時期	備考
		4間×4間(南北1.5m、1.7m×2、2.0m、	13世紀前葉	
SB57	N 3 ° W	東西2.0m×4)、総柱		根石を持つピット多い。北の列は拡張か。
		4間×4間(南北1.4m×2、1.6m×2 東西1.8m	13世紀前葉	l i
SB58	N 3 ° W			根石を持つピットが多い。
			13世紀前葉	
SB59	N 14° W	南北2.0m、東西2,0m		一部がかかるのみ
1			13世紀前葉	
SB60	N 14° W	2間×2間(南北1.4m×2、東西1.6m、1.8m)		
l			13世紀前葉	
S B 6 1	N14° W	3間×2間(南北1.5m、1.6m×2、東西1.2m×2)		
		4間以上×2間以上(南北1.8×2、2間で3.4m、		
SB62	N14° W	東西1.8m、2.4m)	13世紀前葉	西側の柱列は廂か柵の可能性あり。

第1表 掘立柱建物一覧表

遺構番号	性格	小地区	規模(m)	深さ (m)	形状	時期	特記事項
S K 1	土坑	c 2 5	径0.9	0.1	不整円	不明	遺物なし
SE2	井戸	c 2 4	径1.1	1.2	円形	14世紀前葉	
	溝	b 22~ c 23		0.2		14世紀後葉	
	溝	b 22~c 23	幅0.3	1.4		15世紀代?	
	溝	a 26~ c 22	幅0.4	0.2		16世紀以降	奈良時代の須恵器混入
	土坑	c 2 3			円形		撹乱
	溝	c 2 0	幅0.3	0.1			新しい耕作溝
	土坑	c 2 4	径0.7	0.1	不整円形		浅い落ち込み
	溝	a 20~ d 21		0.15			S D 38と同じ溝
S E 1 0		b 2 4	径2.4	1.7	円形		木枠、結桶、刀、花押墨書山茶椀出土
S E 1 1		b 24 · 25	径1.6	2.0	円形	14世紀中葉	SD5、SE10に切られる。
S D 1 2		a 18~ d 20		0.2			新しい耕作溝
S D 1 3		a 19~ d 20	幅0.4	0.2			新しい耕作溝
	落ち込み	b 2 5		0.7	不整形		自然の落ち込み。植物遺体多い。
	落ち込み	a 2 2	4.0×2.5	0.5	楕円形		自然の落ち込み。植物遺体多い。
S D 1 6		a 2 3	幅0.7	0.25		14世紀前葉	
S D 1 7		a11~c12		0.2		14世紀後葉	凶囲溝か?
S D 1 8		b 10 · 11	幅0.5	0.15	ᄣᆖᄼᅗ	101114734	* * * * * * * * * * * * * * * * * * *
SD19		a 9~d11		0.5	断面台形		集落全体を区画する溝 5 B 50のピットを切る
S K 2 0		b 1 2	径1.2 幅4.0	0.3	不整形	13世紀後葉	SB59のピットを切る
		a7~c7 a6~c7		0.7		弥生後期	
S D 2 3		<u>a o ~ c /</u>	幅2.2 幅1.2	0.7		弥生後期	 弧状に巡る溝。SD37下層
S D 2 4		d 1 4	幅1.1	0.4		+	L字に曲がる溝。区画溝か
S D 2 5		a16~d13		0.2		15世紀前葉	
S K 2 6		c 1 3	幅0.9	0.6	円形	13世紀前葉	
S D 2 7		a15~b15	幅0.7	0.1		10世紀削来	耕作溝か
S E 2 8		c 1 7	1.4×0.8	0.6	格円形		井戸か、テラス部を持つ。
S D 2 9		b16~c17		0.0	竹門つル	 	井戸か、アフス即を持つ。 耕作溝か
S K 3 0		b 1 7	辺1.3	0.2	方形		SD23に付設する土坑か
S K 3 1		d 1 8	径0.6	0.45	円形	14世紀中頃	14世紀中頃のピット
S E 3 2		c 1 8	径0.8	0.6	円形		漆椀、しゃもじ出土
S D 3 3		b16~d17	幅0.6	0.2	1 3/12	TOEAUX	TAPEC OF COMP
S K 3 4		c 1 8		0.15	方形		
S K 3 5		d 1 8		0.15	不整形		
S K 3 6		d 1 8		0.1	楕円形		ピットを切る。
S D 3 7					1137 5710	15世紀後葉	
SD38		a20~d21	幅0.5	0.2			鞴羽口出土、S D 9と同じ溝
S K 3 9	土坑	a 1 8	辺1.1	0.15	楕円形か		調査区の一部かかる。
S D 4 0		a 1 7				13世紀前葉	SD23と同じ溝
SK41		b 2 1					撹乱
SK42	土坑	a 2 0		0.3		13世紀前葉	SD47の続きか、調査区に一部かかるのみ。
S K 4 3		b 2 0					撹乱
S D 4 4		a19~d20	幅1.5	0.6	断面台形	13世紀前葉	区画溝か
S D 4 5		a19~c20				耕作溝	SD13と同じ溝
S Z 4 6		c 18, 19		0.1	不整形		砥石、漆器皿出土。SD37に伴うものか。
SD47		b20~d21	幅2.4	0.8	断面台形	13世紀前葉	SD8と同じ溝、区画溝か
SK48		b 2 7	径0.8	0.5			13世紀前葉のピットに切られる。
SK49		c 28	径0.9	0.35	円形		
S D 5 0		a28~c29	幅1.5	0.4			上層より土器多数出土
S K 5 1		b 2 7	径1.1	0.7	円形		12世紀中頃の甕出土。便所か。
S D 5 2		c29,30	幅2.5	0.8			杭が打ちつけられる、「阿加」の墨書山皿
S D 5 3		a29~c29	幅0.7	0.3		13世紀前葉	
SD54		a27~c28	幅0.6	0.3		13世紀前葉	遺物はSD50で取り上げ
S K 5 5		a 2 3	径0.7	0.2	円形		
SK 56	土坑	b 2 8	0.8×0.7	0.4	楕円形	14世紀中葉	

Ⅳ遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして約70箱である。中世の土師器や陶器が中心であり、若干の弥生時代の遺物を含む。ここでは主な遺物について記述する。そのうち東海系無釉陶器の椀を山茶椀、小皿を山皿と呼称する。中世の土器については、遺構と同様14世紀中葉を境に前期と後期に分けて記述した。それぞれの所属時期について、山茶椀については藤澤良祐氏による編年⁽¹⁾に、南伊勢系の土師器鍋については伊藤裕偉氏による編年⁽²⁾に依拠した。個々の遺物の詳細については、出土遺物観察表を参照されたい。なお、墨書については、済宮歴史博物館榎村寛之氏、県史編纂室小林秀氏の御教示を得た。

1 古代以前の遺物(1~7)

調査区の基盤である黒色土から、若干の弥生時代の遺物が出土している。弥生後期の壺(1)はSD50の下層より出土しているが混入であろう。外面は丁寧に縦方向のヘラミガキが施され、内面はハケ、ナデ調整である。高杯(2~4)は柱状の脚部を持ち、タテミガキの後クシ描き横線を施すものであり、同じく弥生後期に属するものである。台付甕(5・6)の脚部である。5は端部に折り返しが見られず、6は折り返し後は未調整である。弥生時代末期~古墳時代初頭のものであろう。また、奈良時代の壺の底部と考えられる須恵器片(7)がSD5から出土しているが、SD5は16世紀以降の溝であり、混入である。

2 中世前期の遺物

S D 50出土土器 (8~47)

並んだ状態で土師器皿と山茶椀が出土しており、 完形のものも多く見られる。13世紀前葉の遺物群で ある。

土師器小皿(8・9)は口径約8.0cm・器高約1.2cm、土師器皿(10~13)は口径約12~13cm、器高約2.5cmで、ともにいわゆる「手づくね」の土器である。土師器皿は薄手のもので、口縁端部はナデられ、面を持つ。11の外面には煤が付着している。

陶器は尾張産、渥美産の両方の山皿、山茶椀が見られる。いずれも藤澤良祐氏の第5~6型式に平行し、12世紀末~13世紀前葉のものである。山茶椀の外面底部には墨書の見られるものも多い。18~22には墨痕が確認されるが、判読できない。そのうちの19は花押が書かれている。23・24は「十」、25は「()√」、26・27は「○」、28・29は「まつ」と思われる。30には底部内面に墨痕が見られる。45~47は南伊勢系の鍋である。いずれも伊藤編年の1bに属し、13世紀前葉のものである。外面には煤が多く付着しており、使用の後廃棄されたものと思われる。

S D 52出土土器 (48~65)

S D52からは12世紀後葉~13世紀前葉(48~60)と15世紀後葉(61~65)の2時期の土器が見られる。 土師器小皿(48~52)は、いずれも口縁部を幅広くヨコナデした口径約8.0cm・器高1.6cmで、やや厚手に作られている。土師器皿(53)は、口径13.1cmで口縁端部は丸くおさめられ、やや厚手に作られている。いずれも12世紀後葉~13世紀前葉の遺物である。

陶器には山皿(54・55)と山茶椀(56~59)がある。山皿はともに尾張産で、55の内面には、「阿加」の墨書が見られる。山茶椀は尾張産と渥美産の両方が見られる。いずれも藤沢編年第5型式のもので、12世紀後葉から13世紀前葉のものであろう。

60と61は南伊勢系の鍋である。いずれも1段階に 属するもので、外面は煤が濃く付着している。

15世紀後葉の遺物としては、鍋や羽釜・陶器擂鉢が出土している。鍋や羽釜は南伊勢系のもので、伊藤編年の4 b と思われる。陶器擂鉢は瀬戸美濃産である。

S D 44出土土器 (70~73)

山茶椀が出土している。70の底部外面には花押が 墨書されている。

S D53出土土器 (76~80)

S D53からは13世紀前葉の山皿、山茶椀が出土している。

S D23出土土器 (82~87)

13世紀前葉の山皿、山茶椀が出土している。

S E 10出土土器 (88~97)

多数の土師器小皿・皿片、山茶椀片が出土しているが、図示できたものは以下の10点である。すべて13世紀前葉頃の遺物である。土師器小皿(88~92)は口径8.0cm前後、器高1.2cm前後と偏平のもので、硬質に焼かれており、いずれもひどく歪んでいる。外面オサエ、内面ナデ調整で、口縁端部がナデられて面を持ち、13世紀前葉のものと思われる。陶器には山皿(93)、山茶椀(94・95)、片口椀(96)がある。山皿、山茶椀はともに尾張産と思われ、第6型式のものである。2つの山茶椀の底部には同じ花押が墨書されている。この墨書はSD44出土の山茶椀に墨書されていたものと同一のものと思われる。片口椀は尾張産である。97は青磁の椀で、龍泉窯系のものである。

SE32出土土器 (98)

出土した土器は少なく、南伊勢系鍋1点を図示したのみである。伊藤編年の2bと思われ、13世紀後葉のものである。

SE2出土遺物 (99・100)

常滑産の広口壺が2点出土している。99は上部のみの出土で、口縁はいわゆるN字状口縁で、下半部にはヘラケズリが見られる。100は下半部のみの出土で、外面下部はヘラケズリされ、底部には石粒の跡が明瞭に残る。共に赤羽・中野編年の7型式⁽³⁾、14世紀前葉のものと思われる。

土坑出土土器 (103~109)

土坑からの出土土器は少なく、土師器や陶器の破 片が見られる程度である。

103はS K20出土の古瀬戸の花瓶である。13世紀 後葉のものであろう。104はS K51出土の大甕であ る。常滑産で、口縁径はcm、体部最大径はcmであ る。下半分が割られた状態で据えられていた。外面 にはタタキによる押印文が帯状に打たれ、内面には 指頭圧痕が明瞭に残る。赤羽・中野編年の2型式、 12世紀中葉のものと思われる。

ピット出土遺物(110~116)

今回の調査区ではピットからの出土遺物は非常に 少なく、大半が土師器の小破片である。ここでは13 世紀代の遺物を説明する。 110、111はともにSB57のピットより出土した土師器の小皿である。ともに口縁端部にヨコナデが施されるが、111のほうがより広くヨコナデされ、厚手の土器である。114と115は土師器鍋の口縁部である。114は南伊勢系鍋仮(A)で、12世紀中葉と考えられるものである。115は1bと思われ、13世紀前葉のものである。

3 中世後期の遺物

S D 25出土土器 (121・122)

122は口径約8.4cmのミニチュアの土師器の羽釜である。外面に薄く煤が付着しており、何かに使用されたことがわかる。内外面とも丁寧にナデられている。14世紀後葉から15世紀前葉の遺物である。

S E 11出土土器 (126)

126は常滑産の練鉢である。内面は擂った跡が顕著に見られ、かなり使用されたことが分かる。

SK14出土土器 (127~134)

127、128は土師器の小皿である。口縁端部のヨコナデは見られず、偏平な作りである。129は伊藤編年3aの鍋で、15世紀前葉のものである。130~134は羽釜である。口縁端部を折り返すもの(130・131・134)、端部に面を持つもの(132・133)がある。

SK15出土土器(135~141)

15世紀後葉の土器を中心に出土している。135は 南伊勢系1 b の鍋であるが、S K15からは山茶椀等 の同時期と思われる遺物はほとんど見られないため、 混入と思われる。136は古瀬戸の尊式花瓶であろう。 鉄釉が施釉され、底部には糸切り痕が残る。139、 140は南伊勢系の4段階に属する鍋である。141は鍔 付茶釜で、内外面とも煤の付着は見られず、火を受 けて使用されていないものと思われる。

S D 37出土土器(142~148)

15世紀後葉の土器群である。142は直径10.8cm、器高3.0cmの土師器皿である。非常に薄い作りであり、外面のオサエを部分的にナデ消している。143は古瀬戸の平椀である。灰釉がツケガケされている。144は古瀬戸の盤である。底部のみの出土であり、器種は不明であるが、底部に高台や足の痕跡は見られない。釉は灰釉である。145~148は南伊勢系の鍋である。いずれも4段階のもので、煤・炭化物が外

面に付着しており、かなり使った後の廃棄と思われる。

S Z 46出土土器 (149~156)

15世紀後葉を中心とした土器が出土している。15 0は口縁径8.0cm、器高2.0cmの土師器皿である。口縁部は内彎し、口縁端部は尖っている。内外面とも煤が付着している。151は伊藤編年の3 a にあたり、15世紀前葉の遺物と考えられるが混入であろう。15 2は金属器の模倣と考えられる鍋で、硬質に焼かれている。153~156は南伊勢系の鍋で4段階のものである。このうち156は体部がかなり偏平な形をしており、16世紀前葉まで下るものと考えられる。

ピット出土遺物(157~164)

前期と同様、後期の遺物もピットからは土師器の破片が見られる程度で、図示できるものはほとんど見られない。鍋の口縁部の破片はいずれも南伊勢系4段階のもので、確認できなかったものの15世紀後葉の掘立柱建物が存在したと思われる。

4 遺物包含層出土の遺物(165~206)

図示した小皿、皿はいずれも手づくねで、口縁端部を丸くおさめるもの、ヨコナデし面を持つものがある。176の土師器皿は口径が11.6cmとやや小型で、14世紀前葉と思われるが、大半が12世紀後葉から13世紀前葉のものである。図示できなかったが若干のロクロ土師器も存在しており、13世紀前葉を中心に12世紀からの土師器が広がっているようである。小皿や皿の中には内面に煤が付着するものも見られる。

178は瓦器である。今回の調査区からは瓦器は2点しか出土していない。いずれも包含層からの出土である。内面には連続輪状文が施される。

陶器は山皿、山茶椀が出土している。181は底部に高台の剝離した痕跡があり、藤沢編年の第4段階のものと考えられる。山茶椀には底部に墨書されたもの(182~185) も見つかっている。墨書されたものはいずれも北西調査区の屋敷地内からの出土である。182は墨書は確認できるものの判読できない。183は花押で、SD44やSE10から出土している花押と同一のものであろう。185は「井」であろうか。山茶椀のうち189は高台が消失しており、第8段階、14世紀前葉のものと思われる。

190~192は青磁の椀である。190、191は外面に蓮

弁文があり、龍泉窯系のものである。192は内面見込みに花弁が印刻され、1/4程度しか残ってないが、中に「□□□堂」の文字が見られる。「金玉満堂」であろうか。四角のスタンプでこのような吉祥句の書かれる例はあるものの、このように花弁の中に書かれる例は珍しい。龍泉窯系のものである。

195は茶釜である。15世紀後葉のものと思われるが壁清掃中に見つかったため出土地点は不明である。

196~201は加工円盤である。196は鉄釉が施釉されており、天目茶碗の体部を加工していると思われる。197は土師器の体部を使用しており、欠いた部分を研磨している。198は片面に釉がかかっており、灰釉陶器の体部を加工したものである。198は14世紀前葉の溝SD16からの出土である。199と200はロクロ土師器の、201は山皿の底部を加工したものである。いずれも意図的にうち欠いている。

202~204は鞴羽口である。202と204はSD38から 出土しており、203は包含層からの出土であるが近 接した地点からの出土である。いずれも使用された もので、被熱による変色、溶解が見られる。調査区 からは若干の鉄滓も出土しており、調査区周辺に工 房が存在していたと考えられる。

205は土錘である。試掘調査の際に出土したものであり、今回の調査では1点も出土しなかった。

5 木製品

井戸等から木製品が出土している。

S E 10出土木製品(207~215)

207と208は曲物の底であろうか。共に釘の痕跡などは見られず、207は直径約20.0cm、208は21.8cmである。209と210は共に四角く面取りされ、先端部及び片面が炭化しており、箸の可能性が考えられる。209はほぼ完存で、約18.8cmである。211、212は共に厚さ1mm程度の非常に薄い板状の木製品である。211は3ヵ所、212は2ヵ所に孔が穿たれ、紐を通して使用されたようである。用途は不明である。213~215は桶を固定するのに使用されていた楔である。楔は計6個見つかっているが、そのうちの3個を図示した。共に断面三角形に削られ、先端部を鋭利に加工している。

S Z 46出土木製品 (216)

216は曲物の底板と思われる。楕円形をしており、 内面には黒漆が塗られ、外面底部は一部炭化してい る。底部はかなり摩耗しているものの、高台の痕跡 が見られる。

SE32出土木製品(217・218)

217は漆器の皿である。全面に黒漆が塗られ、中央に赤漆で円が描かれている。底部はやや突出している。残りは非常に悪い。218はしゃもじである。長時間水に浸っていたためか、明瞭な使用痕は見られない。

S E 2出土木製品 (219)

219は歯部を削り出した連歯下駄である。現存長は約16.3cmで、指先と踵部分には摩滅跡が明瞭に残っており、子供用、右足用であろうか。後ろの歯に比べて前の歯が著しく摩耗し、後ろの歯も左側の摩耗が激しい。内股の人だったのであろうか。

6 石製品 (220~223)

砥石がSZ46から1点(220)、包含層から3点

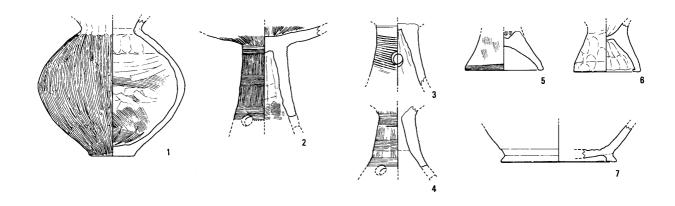
(221~223) 出土している。いずれも断面長方形の 板状のもので、4点ともよく使用されている。

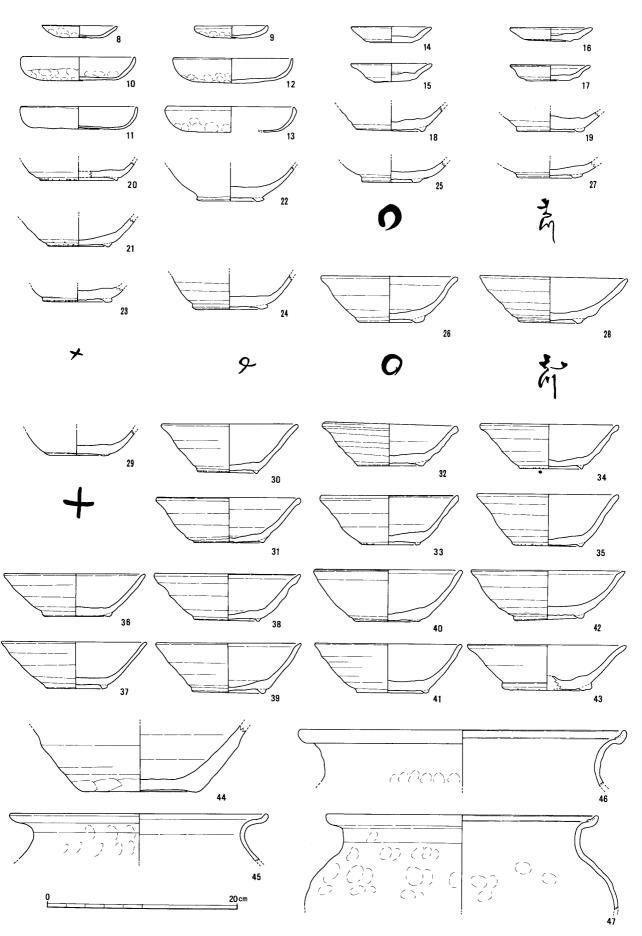
7 金属製品(224~230)

224は S E 10から出土した刀である。古銭は 6 点 (225~230) 出土しているが、いずれも包含層からの出土であり、位置的なまとまりも見られない。文字の見られるものは、開元通宝 1 点、景徳元宝 2 点がある。

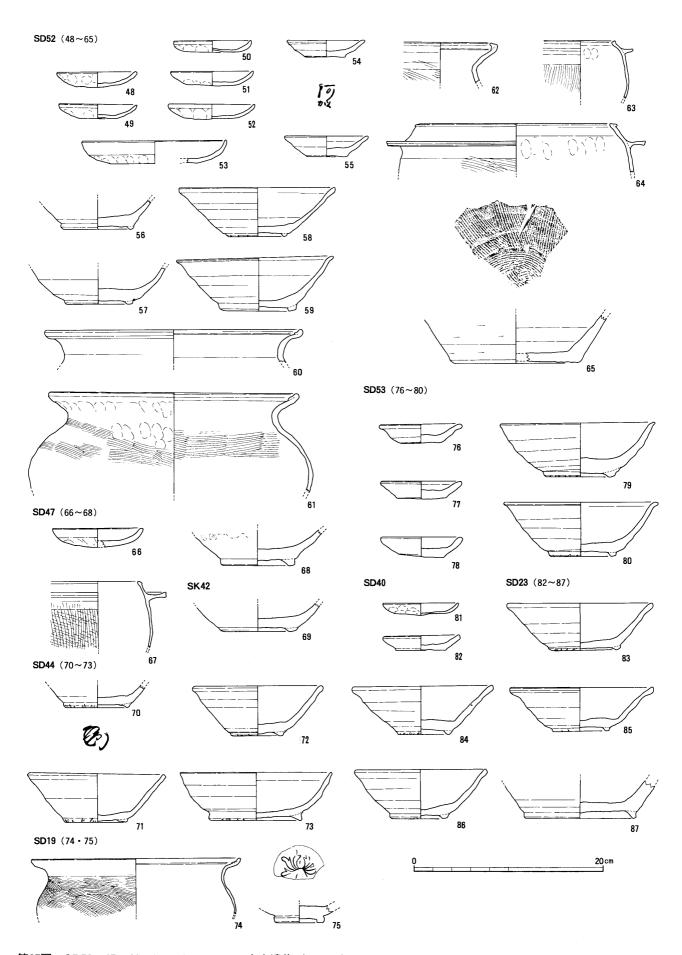
註

- 1)藤澤良祐 (「山茶碗研究の現状と課題」『研究 紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994 年)
- 2) 伊藤裕偉 (「中世南伊勢系の土師器に関する一 試論」 『Mie History』vol. 1 1990年)
- 3) 中野晴久(「生産地における編年について」『常 滑焼と中世社会』小学館 1995年)

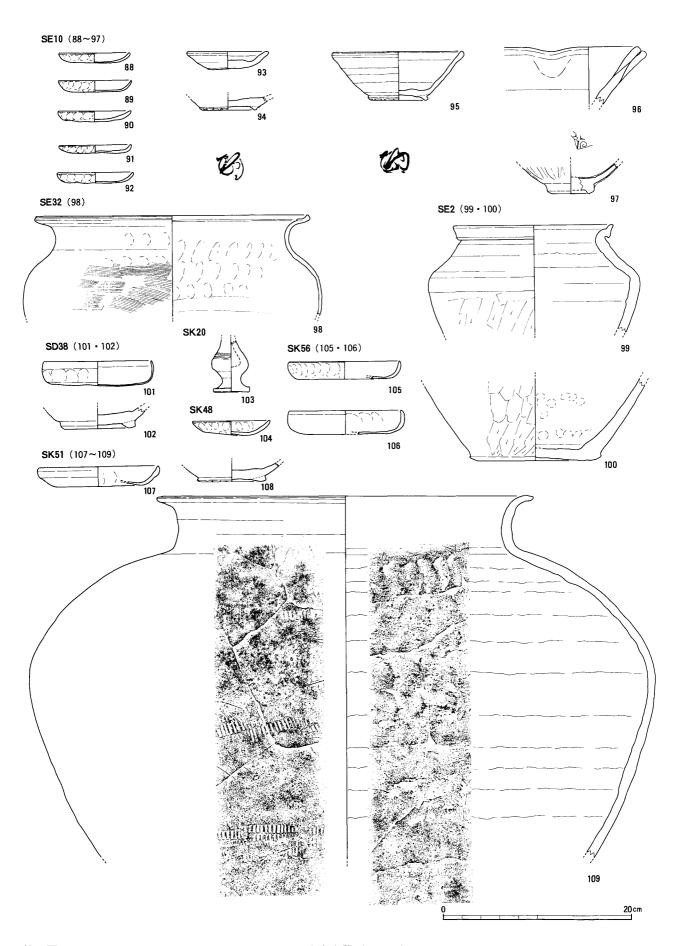




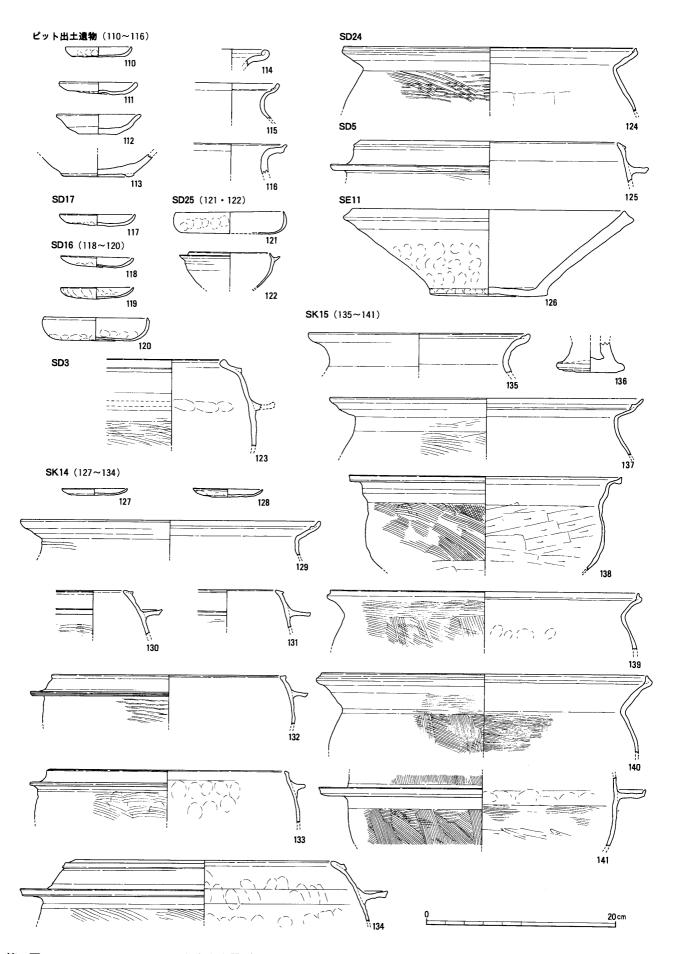
第26図 SD50 出土土器 (1:4)



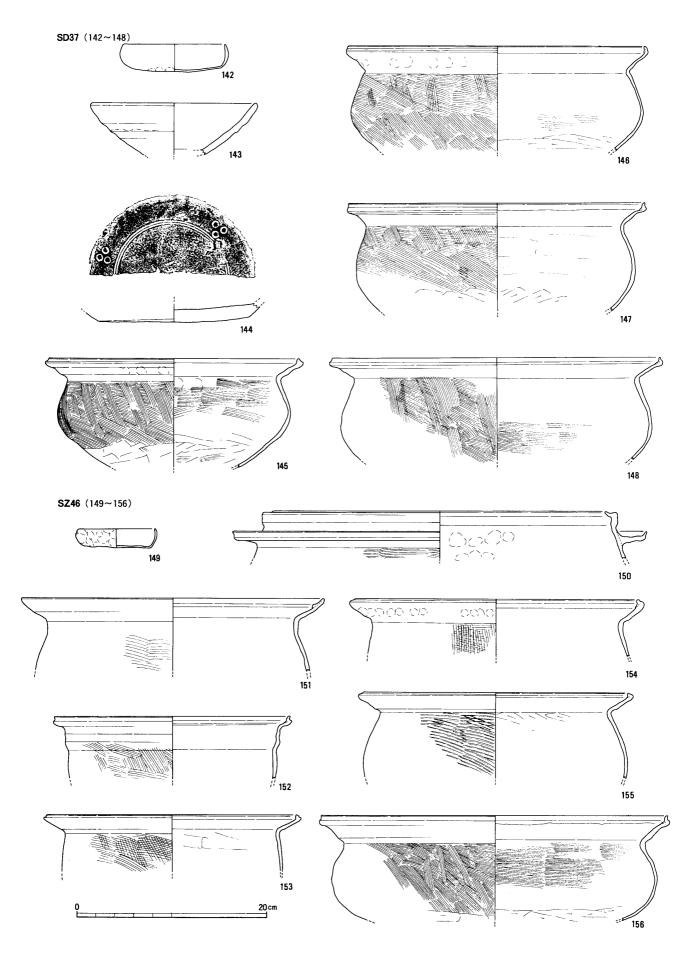
第27図 SD52・47・44・19・53・40・23 出土遺物(1:4)



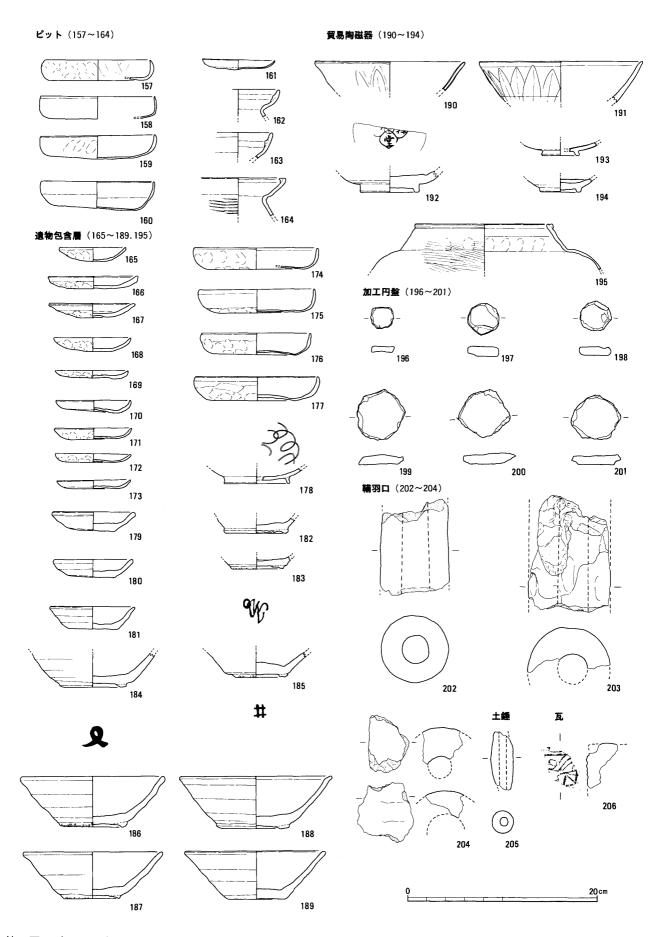
第28図 SE10・32・2、SD38、SK20・48・56・51 出土土器 (1:4)



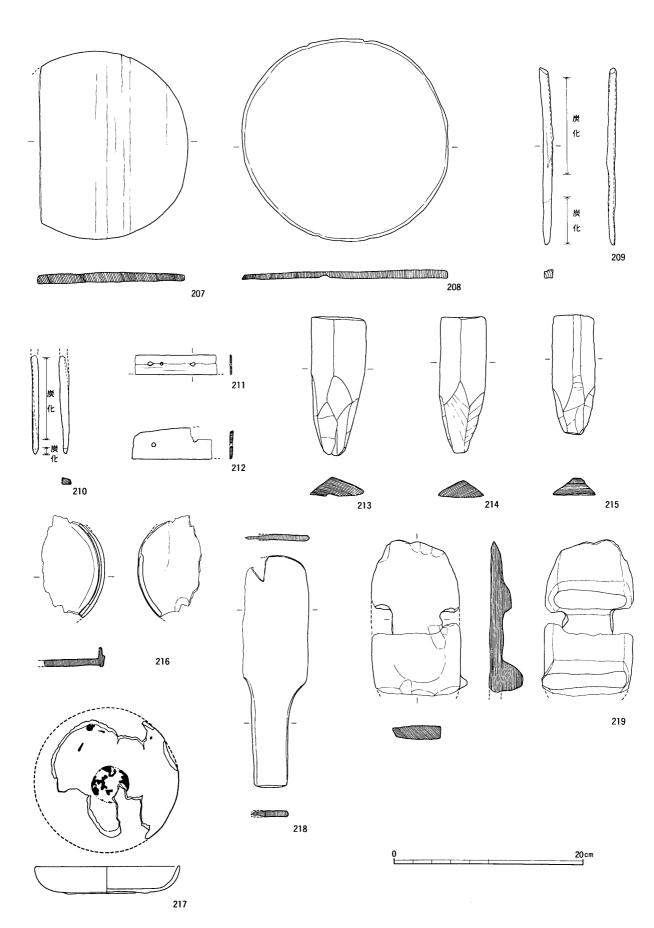
第29図 pit. SD17、SK14・15ほか出土土器(1:4)



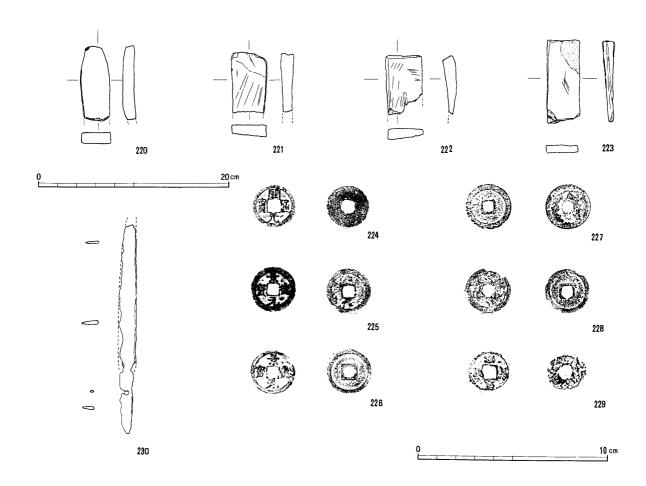
第30図 SD37·SZ46 出土土器 (1:4)



第31図 ピット・遺物包含層出土土器ほか (1:4)



第32図 木製品 (1:4)



第33図 石製品・金属製品 (220~223・230 1:4、224~229、1:2)

番号	実測番号	器種等	小地区	遺構番号	計測値	(cm)	備考
220	024-07	砥石	c-19	SZ46	現長7.8	厚さ1.2	全面摩耗
221	039-02	砥石	b-25	包含層	現長6.5	厚さ1.4	全面摩耗
222	039-03	砥石	a-20	包含層	現長6.3	厚さ1.2	3 面摩耗
223	049-04	砥石	a-22	包含層	現長8.8	厚さ0.8	全面摩耗
224	044-02	銭貨 開元通宝	a-25	包含層	径 2.2		南唐銭
225	044-03	銭貨 景徳元宝	a-23	包含層	径 2.2		北宋銭
226	044-04	銭貨 景徳元宝	a-22	包含層	径 2.2		北宋銭
227	044-05	銭貨	a-23	包含層	径 2.4		
228	044-06	銭貨	c-12	包含層	径 2.3		229と重なって出土
229	044-07	銭貨	c-12	包含層	径 2.1		228と重なって出土
230	044-01	カ	b-24	SE10	現長 22.0	厚さ0.4	刃部欠損

第3表 出土石製品·金属製品観察表

番号	実測番 号	器種等	小地 区	過構名	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	焼成	残存	特記事項
1	016-02	弥生土器 壷	b-28	SD50下	最大径15.6 底径 4.4	外:タテ方向のミガキ 内:オサエ、ナデ、ハケメ、ナデ	やや粗	にぶい橙	良	体部2/ 3	混ざり込み
2	049-01	弥生土器 高杯脚		黒色土		外:ミガキ、クシ描横線文 内:ハケメ、	やや粗	にぶい橙	並		
3	052-01	弥生土器 高杯脚		黒色土		外:横線文 内:ケズリ	やや粗	淡黄	並		
4	049-02	弥生土器 高杯脚		黒色土		外:ミガキ、クシ描横線文 内:ケズリ、工具ナデ	やや粗	にぶい橙	並		
5	042-06	台付 甕 台部	c-27	黒色土	台径 8.1	外:ハケメ 内:ナデ	やや粗	にぶい橙、灰黄 褐	並	台部1/ 6	
6	045-03	台付 甕 台部	c-27	黒色土	台径 7.0	外:オサエ、ナデ 内:オサエ、ナデ	やや粗	にぶい橙	並	底部3/ 4	
7	023-04	須恵器 壷か	b-24	SD5	高台径12.2	ロクロナデ、自然釉付着	もも南	黄灰	並	底部1/ 6	流れ込み
8	011-02	土師器 小皿	b-28	SD50		外:オサエ、ナデ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	もも南	橙	並	完存	
9	030-08	土師器 小皿	a-28	SD50	□径 7.6 器高 1.5	外:オサエ、ナデ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	やや粗	浅黄橙	並	ほぼ完 存	
10	011-01	土師器 皿	b-28	SD50	口径 11.8 器高 2.5	外:オサエ、ナデ 内:オサエ、ナ デ 口縁端部ヨコナデ	もも粗	外・灰白、内・ 橙	並	ほぼ完 存	
11	002-02	土師器 皿	b-28	SD50	器高 2.9	外:オサエ、ナデ、内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	雤	灰白	良	完存	
12		土師器 皿	b-28	SD50	器高 2.6	外:オサエ、ナデ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	むか留	浅黄橙	並	□縁部 3/4	底部スス付着
13	036-03		b-28	SD50	器高 2.7	外:ナデ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	むか留	浅黄橙	並	口縁部 1/4	
14	011-03	山皿	b-28	SD50	器高 1.7	ロクロナデ、底部糸切り	やや粗		良	ほぼ完 存	尾張
15	051-04	陶器 山皿	a-28	SD50	器高 2.0	ロクロナデ、底部内面ナデ、底部糸 切り後ナデ、板圧痕	やや密	灰白	良	□縁部 4/5	渥美
16	014-03	山皿	<u> </u>	SD50	器高 1.4	ロクロナデ、底部糸切り後ナデ、 自然釉付着	もも南		並		尾張
17	042-03	山皿		SD50	器高 1.7				良	□縁部 2/3	
18	048-04	山茶椀		SD50		ロクロナデ、底部内面ナデ、底部糸 切り後ナデ、底部に板圧痕			並	ぼ完存	
19	014-04	山茶椀		SD50		ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、自然釉付着			良	存	底部墨書(花押か) 渥美
20	023-03	山茶椀		SD50		ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、高台に籾殻痕			並	存	底部墨書あり
21		山茶椀		SD50		ロクロナデ、底部糸切り後ナデ、貼 付け高台、高台に籾殻痕			良	底部完 存	
22		山茶椀		SD50	高台径 5.8	台			良	存	底部墨書(花押) 渥美
23		山茶椀				ロクロナデ、底部内面ナデ、底部糸 切り後ナデ、板圧痕			良	5	底部墨書(「十」) 渥美
24	005-06	山茶椀			l	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台			良	3	底部墨書(「十」) 渥美
25	002-04	山茶椀	c-29			ロクロナデ、底部糸切り後ナデ貼付け高台			良	み	底部墨書(記号) 渥美
26	017-05	山茶椀		SD50		ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、自然釉付着			良	存	底部墨書 渥美
27	013-05	山茶椀	b-28			台、自然釉付 着		灰白	並	1/3	底部墨書 渥美
28	017-02	山茶椀		SD50		ロクロナデ、底部糸切り後ナデ、貼付け高台、		"\"	良	存	底部墨書(「まつ」か)、渥美
29	048-02	山茶椀	b-27		口径 15.8 器高 5.1	台			並	1/5	底部墨書(「まつ」 か) 渥美
30		陶器 山茶椀		SD50	器高 6.1	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高台、高台に籾殻痕		灰白	良	3/5	内面墨痕 尾張
31		陶器 山茶椀		SD50	器高 4.8	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高台、内面底部ナデ			良	完存	尾張
32		山茶椀	c-29	SD50	器高 4.7	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、自然釉付着		灰白	良	完存	尾張、歪みあり
33	023-02	山茶椀		SD50	器高 5.2	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高台、高台に籾殻痕			並	1/8	底部墨書 尾張
34	012-02	山茶椀		SD50	器高 6.0	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、高台に籾殻痕		灰白	良	ほぼ完形	
35		山茶椀		SD50	器高 5.5	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、高台に籾殻痕、自然釉付着		灰白	並	完存	歪みあり、□縁一部 煤付着、尾張
36		陶器 山茶椀	c-28	SD50		ロクロナデ、底部内面ナデ、底部糸 切り後ナデ、貼付け高台	でや密		良	□縁部 1/6	渥美

第4表 出土遺物観察表(1)

番号	実測番 号	器種等	小地 区	遺構番 号	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	焼成	残存率	備考
37	013-03	陶器 山茶椀	c-29	SD50		ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、底部内面ナデ、自然釉付着	やや密	灰白	並	口縁部 1/2	渥美か
38	013-02	陶器 山茶椀	b-28	SD50	□径 15.3	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、自然釉付着	やや粗	灰白	並		内面に重ね焼き痕あり,重い、尾張
	013-04	陶器 山茶椀	c-29	SD50	□径 15.4	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 や 台、自然釉付着		灰白	並		正み大 、口縁一部煤 付着、渥美
	022-04		b-28	SD50	□径 15.9	ロクロナデ、底部糸切り後ナデ、貼付け高台、	やや密	黄灰	並	口縁部 1/12	
	012-03		a-28	SD50		ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高	やや粗	灰白	良	口縁部 4/5	尾張
	011-05	陶器 山茶椀	c-29	SD50		ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高	やや粗	灰白	良	口縁部	渥美
\rightarrow	011-04		b-28	SD50	口径 16.7	ロクロナデ、底部糸切り後ナデ、貼 付け高台、高台に籾殻痕	密	灰白	良	1/2 □縁部 1/6	底部重ね焼き痕明瞭 渥美
-	037-04	陶器 鉢	a-28	SD50		外:ロクロナデ、ケズリ、底部ナデ 内:ロクロナデ	やや粗	灰白	並	底部1/ 3	/柱大
\rightarrow	014-01	土師器 鍋	b-28	SD50	□径 27.0	外:ヨコナデ、オサエ、ナデ 内:ヨコナデ、オサエ、ナデ	やや粗	浅黄橙	並	口縁部	外面煤付着
	007-01		a-28	SD50	口径 35.2	<u>内: ココテテ</u> 、テサエ 外: ヨコナデ、テサエ 内: ヨコナデ	やや粗	浅黄橙	並	1/10 □縁部 1/6	外面煤付着
	051-01		c-29	SD50	口径 28.6	外:ヨコナデ、ヹサエ、ナデ	やや粗	橙	並		外面煤付着
-	027-03		c-30	SD52		内: ヨコナデ、オサエ、ナデ 外: オサエ 内: ナデ 口縁端部ヨコナデ 一部黒斑あり	やや粗	浅黄橙	並	1/4 ほぼ完 存	
-			c-30	SD52	口径 8.2	外:オサエ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	密	淡黄	並	口縁部 3/8	
-			c-30	SD52	□径 8.0	ハ : オサエ、内 : オサエ、ナデロ縁端部ヨコナデ	密	灰黄褐	不良	口縁部 2/3	
	030-06		c-30	SD52	□径 8.6	外:オサエ、ナデ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	やや粗	淡黄、灰白	並	□縁部 1/3	
	017-06		c-30	SD52	口径 8.9	外:オサエ、内:オサエ、ナデ	密	褐灰、口縁一部	良	口縁部	
_	027-01		c-30	SD52	口径 15.2	口縁端部ヨコナデ 外:オサエ、ナデ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	やや粗	<u>灰白</u> にぶい橙	並	1/2 □縁部	
-	008-05		a-29	SD52	□径 8.2	ロクロナデ、底部糸切り	かや密	灰白	並	1/4 完存	尾張
_	029-06		c-30	SD52		ロクロナデ、底部糸切り、自然釉付	密	灰白	良		内面底部墨書(阿加
	025-06		c-29	SD52		クロナデ、底部糸切り、貼付け高台	やや粗	灰白	良	1/4 底部完	か) 渥美
			c-30	SD52	高台径 6.3	ロータロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、自然釉付着	やや密	明褐灰	並	存 底部完	渥美
	017-01		c-30	SD52	口径 16.4 器高 6.0	ロクロナデ、内面底部ナデ、底部糸 切り、貼付け高台、高台に籾殻痕	やや粗	灰白	良	存 □縁部	尾張
	008-01		c-30	SD52		ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高	やや粗	灰白	並	1/6 完存	内面底部に煤付着
	026-02		c-30	SD52		外:ヨコナデ	やや密	灰褐	並	口縁部	尾張
	006-01		c-30	SD52	口径 26.6	内:ヨコナデ、ナデ 外:ヨコナデ、オサエ、ハケメ カ:ヨコナデ、カケィ、ナデ	やや粗	にぶい黄橙	並		外面煤付着
	025-02		c-30	SD52	口径 不明	内: ヨコナデ、ハケメ、ナデ 外: ヨコナデ、ハケメ 内: ヨコナデ、ナデ	やや粗	にぶい黄橙	並	2/3 □縁破	
			c-30	SD52	口径 不明	内:ヨコナデ、ナデ 外:ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内:ヨコナデ、オサエ、ナデ	やや密	浅黄橙	並		外面煤付着
			c-30	SD52	口径 20.2	例:ヨコノア、ミリエ、アア 外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、オサエ、ナデ	やや密	外・浅黄橙内・	並	片 □縁部	
-			c-30	SD52	底径 13.2	外:ロクロケズリ、底部糸切り 内:クシ描き	粗	灰白 釉・にぶい赤褐 色	良	1/6 底部1/ 4	瀬戸
\rightarrow	029-05		c-21	SD47		外: 工具ナデ 内: ナデ 口縁端部ナデ	やや密	にぶい黄橙	並	口縁部	
	019-03		c-21	SD47		小藤崎印 り 外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ	やや密	浅黄橙	並		煤付着
			c-21	SD47	高台径 7.8	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台	やや粗	明青灰	良		自然釉か
\rightarrow			a-20	SK42	高台径 6.8	ロ ロクロナデ、底部糸切り後ナデ、貼 付け高台	やや粗	灰白	良	存 底部1/ 3	渥美
			d-21	SD44	高台径 7.0	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、高台籾殻痕	やや粗	灰	並	底部完	底部墨書(花押)
$\overline{}$			d-20	SD44		ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、高台に籾殻痕	やや密	黄灰	並	存 □縁部	尾張
	010-05		d-21	SD44	口径 13.4	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、高台に籾殻痕	やや密	灰白	並	1/2 口縁部 1/8	尾張

第5表 出土遺物観察表(2)

番号	実測番号	器種等	小地 区	遺構番 号	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	焼成	残存率	備考
73	010-01	陶器 山茶椀	a-19	SD44		ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、高台籾殻痕	もも的	灰白	良	□縁部 1/12	内面使用により摩耗 渥美
74	007-02	土師器 鍋	a-9	SD19	□径 22.3	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、エ具ナデ	やや密	にぶい黄橙	並	口縁部 1/3	外面煤付着
75	043-04	磁器 青磁椀	b-9	SD19	高台径 5.2	ロクロナデ、削り出し高台、施釉	やや密	灰白、釉:オリ -ブ灰	並	底部1/ 3	
76	004-04	陶器 山皿	c-29	SD53	口径 8.4 器高 2.0	ロクロナデ、底部糸切り	やや密	灰	良	口縁部 5/6	渥美
77	004-05	陶器 山皿	b-28	SD53	□径 8.3 器高 1.9	ロクロナデ、底部糸切り	もも的	明紫灰	良	完存	底部墨書(判読不能)
78	031-06	陶器 山皿	b-28	SD53	器高 4.8	ロクロナデ、内面底部ナデ、底部糸 切り			良	□縁部 1/2	底部墨痕あり
79		山茶椀	c-29	SD53	器高 5.8	ロクロナデ、底部内面ナデ、底部糸 切り後ナデ、貼付け高台			良	口縁部 1/3	渥美
80		陶器 山茶椀	c-29	SD53	器高 6.0	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、自然釉付着	やや粗	灰白	並	口縁部 2/3	歪み大、内外に重ね 焼き痕、尾張
81		土師器 小皿	a-17	SD40	器高 1.3	外:オサエ、内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	やや密	淡黄	並	ほぼ完 存	
82		陶器 山皿	b-16	SD23	器高 1.6	ロクロナデ、底部糸切り	やや粗		並	完存	渥美
83		陶器 山茶椀	b-16	SD23	器高 5.1	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、高台に籾殻痕			並	1/2	内面に煤付着 尾張
84		陶器 山茶椀	b-16	SD23	器高 5.2	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、高台に籾殻痕、自然釉付着			並	口縁部 小片	
85		陶器 山茶椀	b-16	SD23	器高 5.2	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、高台に籾殻痕、自然釉付着			並	3/4	歪み大、尾張
86		陶器 山茶椀	b-16	SD23	器高 5.2	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、高台に籾殻痕			並	1/3	歪み大 、尾張
87		陶器 鉢	b-18	SD23		ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台		灰	並	底部1/ 4	
88		土師器	b-25	SE10	器高 1.0	外:オサエ、内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	やや密	灰白	良	存	歪み大
89		小皿	b-25	SE10	器高 1.2	外:オサエ、内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	やや密	灰白	良	2/3	歪み大
90		土師器	b-25	SE10	器高 1.1	外:オサエ、内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	密	灰白	良	ほぼ完 存	
91		土師器 小皿	b-25	SE10	器高 1.2	外:オサエ、内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	密	灰黄	良	完存	歪み大
92		小皿	b-25	SE10	器高 1.3	外:オサエ、内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	盤	灰白	良	存	歪み大
93		山皿	b-25	SE10	□径 8.3 器高 1.9		やや密	灰白	良	2/5	渥美か
94		陶器 山茶椀	a-25	SE10		ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、内面底部ナデ、高台籾殻痕		灰	良	存	底部墨書(花押) 尾張
95		山茶椀	b-25	SE10	器高 4.5	ロクロナデ、底部糸切り、貼付高台 、内面底部ナデ、高台に籾殻痕			良	存	底部墨書(花押) 尾張
96		片口鉢	a-25						並	口縁破片	
97		青磁 椀	b-25	SE10		ロクロナデ、削り出し高台、施釉	密	ープ	並	底部1/ 6	
98		鍋	c-18	SE32		外:ヨコナデ、オサエ、ハケメ、 内:ヨコナデ、オサエ、ナデ		にぶい橙	並	1/4	外面に煤付着
99		広口壷	c-24	SE2		外:ヨコナデ、ケズリ 内:ヨコナデ		にぶい橙	良	□縁部 1/12	
100		陶器 壷		SE2		外:工具ナデ、ケズリ、底部小石痕 内:オサエ、ナデ、		にぶい赤褐	良	底部1/ 3	常滑
101					器高 11.4	外:オサエ、ナデ 内:オサエ、ナデ	密	灰白	良 	ほぼ完 存	
102		山茶椀	a-20			ロクロナデ、底部糸切り	やや密		並	底部ほ ぼ完存	
103		花瓶	b-12			ロクロナデ、ロクロによる沈線、 底部糸切り	密	淡黄	良	底部完 存	瀬戸
104		小皿	c-27		器高 1.3	外:オサエ、ナデ、内:ナデ 口縁端部ヨコナデ		にぶい橙	並	完存	
105		Ш	b-26		器高 1.9	外:オサエ、ナデ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ		灰白	並	口縁部 1/6	
106			b-28		器高 2.4	口縁端部ヨコナデ		灰白	並	口縁部 1/3	
107		<u> </u>	b-27		器高 2.1	内面に工具痕、口縁端部ヨコナデ	もも略		並	口縁部 1/6	
108	037-03	陶器 山茶椀	b-27	SK51		ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、高台に籾殻痕	やや密	灰白	良	底部完 存	渥美

第6表 出土遺物観察表(3)

	実測番 号	器種等	小地 区	遺構番 号	計測値 (cm)	調整・技法等の特徴	胎土	色調	焼成	残存率	備考
109	015-01	陶器 甕	b-27	SK51	残存高38.0	外:ヨコナデ、指オサエ、タタキ3 段、自然釉付着 内:オサエ後ナデ		鈍い橙、釉:オ リーブ灰、	良	上半完 存	下半分が割られ、正 立状態で出土
110	007-06	土師器 小皿	c-27	pit.3	器高 1.1	外:オサエ、内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	もも南	灰白	並	□縁部 1/4	
111	007-05	土師器 小皿	a-24	pit.1		外:オサエ、内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	おか的	灰白	並	完存	
112	029-04	陶器 山皿	c−27	pit.1	器高 2.2	縁端部自然釉、	節みみ	灰白	並	1/2	重ね焼き痕あり、尾 張
113	008-02	陶器 山茶椀	a-24	pit.1		ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、	やや粗	灰白	並	底部完 存	
114		土師器		pit.1		ョコナデ 		にぶい褐	不良	片	混ざり込みか
115		土師器		pit.4	口径不明			灰白	並	口縁破片	
116		陶器 広口壷	c-26	pit.5		ロクロナデ		にぶい赤褐	並	片	常滑、混入か
117		小皿	b-11	SD17	器高 1.3	外:オサエ、ナデ、内:ナデ 口縁端部ヨコナデ		灰白	並	完存	
118		小皿	a-23	SD16	器高 1.1	外:オサエ、ナデ 内:オサエ、ナデ	密	浅黄橙	並	口縁部 3/4	
119		土師器		SD16	器高 1.3	外:オサエ、ナデ 内:オサエ、ナデ	やや密	浅黄橙	並	□縁部 4/5	
120		土師器		SD16	器高 2.4	外:オサエ、ナデ 内:オサエ、ナ デ 口縁端部ヨコナデ		浅黄橙	並	口縁部 1/4	
121		土師器		SD25	器高 2.4	外:オサエ、ナデ 内:ナデ	やや密	灰白	並	口縁部 1/4	
122	016 – 03	羽釜		SD25		外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、ナデ		外・にぶい褐、内・浅黄橙	並	2/3	ミニチュア、煤付着
123	025-01	土師器 羽釜 土師器		SD3 SD24		外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、オサエ、ナデ 外:ヨコナデ、ハケメ	やや粗	灰白	並	口縁破 片 口縁部	
124	016-01	上師器 土師器	a-24	SD5		外:ヨコナテ、ハクメ 内:ヨコナデ、オサエ・ナデ、 外:ヨコナデ、ハケメ	やや粗	外・にぶい褐、内・灰白	不良	1/4	鍔部に煤付着
125		羽釜 陶器		SE11		外:ョコテテ、ハクタ 内:ナデ 外:ヨコナデ、オサエ 底部ナデ		灰白 にぶい橙	並	1/8	内面の使用痕顕著
126		練鉢		SK14	器高 9.2	ハ・ココナデ、オッエ 底部ナナ 内:ヨコナデ、ナデ 外:オサエ、ナデ	密密	灰白	良 並	1/6	常滑
127		小皿 土師器		SK14	器高 0.7	ハ: カッエ、ノノ 内: オサエ、ナデ 外: オサエ	密	灰白	並	口縁部	
128		小皿 土師器		SK14	器高 0.8	<u>内: ナデ</u> 外: ヨコナデ、ハケメ	やや密	灰白	並	4/5	外面煤付着
129		鍋 土師器		SK14		内:ヨコナデ、ナデ 外:ヨコナデ、ハケメ	やや密	灰白	並	1/12	鍔下煤付着
130		羽釜 土師器		SK14		内: ヨコナデ、ナデ 外: ヨコナデ、ハケメ	やや密	灰白	並	片	外面鍔下に煤付着
131	035-02	羽釜 土師器	b-25	SK14		内:ヨコナデ、オサエ、ナデ 外:ヨコナデ、ハケメ	やや密		並	片	鍔下煤付着
132	040-01	羽釜 土師器	b-25			内:ナデ 外:ヨコナデ、ハケメ		外・灰白、内・	並	1/8	
133	040-03	羽釜 土師器	b-25	SK14	□径 27.0	内:ヨコナデ、オサエ、ナデ 外:ヨコナデ、ハケメ	やや粗	にぶい橙 灰白	並	1/11	鍔下煤付着
	025-05	羽釜 土師器	a-22	SK15	口径 23.4	<u>内:ヨコナデ、オサエ、ナデ</u> 外:ヨコナデ、ナデ	やや密	外・にぶい黄橙	並	1/11	
	018-04	鍋 陶器	a-22	SK15	底径 5.7	内:ヨコナデ、ナデ ロクロナデ、底部糸切り、施釉	密	、内・灰褐 にぶい橙、釉・	良	1/8 底部完	瀬戸
	020-02	花瓶 土師器	a-22	SK15	口径 33.2	外:ヨコナデ、ハケメ	粗	灰オリープ 灰白	並		外面煤付着
	023-01	鉛 土師器	a-22	SK15	口径 29.0	内:ヨコナデ、ナデ 外:ヨコナデ、ハケメ、ケズリ	密	灰白	並		外面煤付着
138 139	030-01	鍋 土師器	a-22	SK15	□径 32.8	<u>内:ヨコナデ、ケズリ</u> 外:ヨコナデ、ハケメ カ:ココナデ、ホデ	密	にぶい黄橙	並		外面に炭化物付着
-	020-03	鍋 土師器 鍋	a-22	SK15	口径 34.6	内:ヨコナデ、ナデ 外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ、ハケメ	やや密	浅黄橙	並		外面煤付着
-	020-01	町 土師器 茶釜	a-22	SK15	鍔径 34.8	内:ヨコナデ、ナデ、ハケメ 外:ハケメ、ヨコナデ、ハケメ 内:ナデ、オサエ、ナデ、ケズリ	密	浅黄橙	並	1/8 鍔部1/ 3	
_	021-02	土師器皿	c-15	SD37		外: / / / 、	やや密	灰白	並	完存	
	031-01	施器 平椀	b-18	SD37		<u>外:ロクロナデ、ロクロケズリ、施</u> 釉 内:ロクロナデ、施釉	やや粗	灰白、釉·浅黄	並	□縁部 1/4	
144	009-01	陶器盤か	b-15	SD37	底径 16.0	M : ロクロケズリ 外: ロクロケズリ 内: ロクロナデ、沈線、施釉	やや密	灰白、釉オリー ブ黄	並	底部1/ 2	瀬戸

第7表 出土遺物観察表(4)

	実測番 号	器種等	小地 区	遺構番 号	計測値 (cm)	調整・技法等の特徴	胎土	色調	焼成	残存率	備考
145	001-02	土師器 鍋	b-18	SD37	□径 26.4	外:ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内:ナデ、オサエ、ハケメ、ケズリ	やや密	淡黄	並	□縁部 1/3	外面煤付着
_	006-02		a-17	SD37	□径 32.2	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、工具ナデ、ケズリ	やや密	灰褐	並		外面煤付着
147	001-01		a-17	SD37	口径 31.4	外:ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内:ヨコナデ、工具ナデ、ケズリ	せ む 密	灰白	並		外面煤付着
	033-02		d-15	SD37	□径 35.6	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ハケメ	せ や密	にぶい橙	並		外面煤付着
	027-04	土師器 小皿	c-19	SZ46	口径 8.0 器高 2.1	外:オサエ 内:ナデ	密	にぶい橙	並	□縁部 5/6	内面に煤付着
150	004-01	土師器 羽釜	c-18	SZ46		外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、オサエ・ナデ	やや密	浅黄橙	並	口縁部 1/6	外面煤付着
151	032-02	土師器 鍋	c-18	SZ46	□径 32.2	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ	もも南	灰白	並	口縁部 1/8	
152	032-01	土師器 鍋	c-18	SZ46	□径 25.4	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、工具ナデ	もも南	灰白	良	□縁部 1/3	
153	034-02	土師器 鍋	c-18	SZ 4 6	口径 27.4	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、工具ナデ	やや密	にぶい黄橙	並	口縁部 1/6	外面煤付着
154	021-01	土師器 鍋	d-19	SZ46	口径 31.5	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ	もも南	灰白	並	口縁部 完存	外面煤付着
155	034-01	土師器 鍋	c-18	SZ46	口径 29.4	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ケズリ、工具ナデ	やや密	灰白	並	□縁部 1/5	外面煤付着
156	033-01		d-19	SZ46	口径 37.4	外:ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内:ヨコナデ、ハケ、ナデ、ケズリ	やや密	灰白、褐灰	並		外面煤付着
157	036-04	土師器 皿	d-16	pit.1		外:オサエ、ナデ 内:工具ナデ	もも密	灰白	並	口縁部 1/3	
158	041-03	土師器 皿	d-16	pit.1		外:オサエ、ナデ 内:ナデ	やや密	灰白	並	□縁部 1/4	
159	007-03	土師器 皿	d-16	pit.1	□径 12.3	外:オサエ、ナデ 、内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	やや密	灰白	並	□縁部 7/8	
160	002-01	土師器 皿	d-16	pit.1		外:オサエ、ナデ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	密	浅黄橙	良	完存	
161	021-03	土師器 小皿	b-11	pit.5	□径 7.7	外:オサエ、ナデ 内:ナデ	もも曽	灰白	並	□縁部 1/3	
162	016-05	土師器 鍋	b-12	pit.8	口径 不明	ヨコナデ	もも南	にぶい橙	良	口縁破片	
163	021-04	土師器 鍋	d-19	pit.2	口径 不明	ナデ	ち む 南	灰白	並	口縁破片	
164	021-06	土師器 鍋	d-19	pit.1	口径 不明	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ナデ	せ む 南	にぶい黄橙	並	口縁破片	
165	041-10	土師器 小皿	c-26	包含層		外:オサエ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	もも留	灰白	並	完存	
166	041-04	土師器 小皿	a-26	包含層		外:オサエ、ナデ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	やや粗	にぶい橙	並	口縁部 1/2	
167		小皿	a-26	包含層	器高 1.6	外:オサエ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ		にぶい橙	並	口縁部 3/4	内外面ともスス付着
168	041-06	土師器 小皿	c-27	包含層		外:オサエ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	やや粗	浅黄橙	並	口縁部 3/4	
169	041-09	土師器 小皿	c-25	包含層		外:オサエ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	やや粗	灰白	並	完存	
170	038-07	小皿	c-25	包含層	口径 8.0	外:オサエ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	密	灰白	並	口縁部 3/5	
171	041-07	土師器 小皿	c-26	包含層		外:オサエ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	やや粗	灰白	並	完存	
172		小皿	c-26	包含層		外:オサエ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ		灰白	並	口縁部 3/4	
173	038-04	土師器 小皿	c-25	包含層	口径 7.8	外:オサエ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	もも南	淡黄	並	完存	
174	036-06	土師器 皿	c−26	包含層	口径 13.0	外:オサエ、ナデ 内:工具ナデ 口縁端部ナデ	やや密	灰白	並	□縁部 1/4	
175	041-01	土師器 皿	c-27	包含層	口径 12.2	外:オサエ、ナデ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	やや粗	灰白	並	□縁部 3/4	
_	041-02	土師器 皿	d-20	包含層	口径 11.5	外:オサエ、ナデ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	やや粗	灰白	並	□縁部 3/4	
177	027-02	土師器 皿	b27	包含層	口径 13.1	外:オサエ、ナデ 内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	やや密	にぶい橙	並	口縁部 1/2	
178	049-03	瓦器 椀	c-19	包含層	高台径 7.0		やや密	暗灰	並	高台 1 / 6	
_	042-02	陶器 山皿	c−26	包含層	□径 8.4	ロクロナデ、底部内面ナデ、底部糸切り	やや粗	灰白	良	/ □縁部 3/4	尾張
	043-06		b-25	包含層	□径 8.4 器高 1.9	ロクロナデ、底部糸切り	やや密	灰白	並	5/4 ほぼ完 存	

第8表 出土遺物観察表(5)

番号	実測番 号	器種等	小地 区	遺構番 号	計測値 (cm)	調整・技法等の特徴	胎土	色鯛	焼成	残存率	備考
\vdash		陶器 小椀	a-25	包含層			やや密	灰白	良	ほぼ完 存	高台剥離 尾張
182	023-06	陶器 山茶椀	d-21	SD5		ロクロナデ、底部糸切り後ナデ	せ や 密	灰白	並		底部墨書
183	038-03		c-24	SE2	高台径 5.3	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台、高台に籾殻痕	やや密	灰白	並		底部墨書(花押) 尾張
184	051-03		d-20	包含層	高台径 6.0	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台	やや密	灰白	良		底部墨書(記号)
185	048-03	陶器 山茶椀	a-18	包含層	高台径 5.6	ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高 台	やや粗	灰白	並		底部墨書(「井」か
186		陶器 山茶椀	c-26	包含層			やや密	灰白	並	ほぼ完 存	・ 外面□縁部に重ね焼 き痕 渥美
187	052-03	陶器 山茶椀	c-26	包含層		ロクロナデ、底部糸切り、貼付け高	粗	灰白	並		底部すす多く付着
188	046-01	陶器 山茶椀	a-24	包含層		ロクロナデ、底部糸切り後ナデ、貼 付け高台	やや密	灰白	良	ほぼ完 存	渥美
189	037-05	陶器 山茶椀	b-20	包含層	口径 14.8 器高 5.1	ロクロナデ、底部糸切り、自然釉付 着	やや粗	灰白	並		底部墨書(花押か)
190	043-04	磁器 青磁椀	b-9	包含層	高台径 5.2	ロクロナデ、高台削り出し、施釉	もも南	灰白、釉・オリ ープ灰	並	底部1/ 3	
191	039-05	磁器 青磁椀	b-27	包含層	□径 17.4	ロクロナデ、高台削り出し、施釉	密	灰白、釉·明緑 灰	良	口縁部 1/6	
192	043-03	磁器 青磁椀	c-15	包含層	高台径 6.3	ロクロナデ、高台削り出し、施釉	雤	灰、釉・灰オリ ーブ	並	底部1/ 2	
193	031-03	磁器 白磁椀	b-20	SK43	高台径 3.8	ロクロナデ、施釉、削り出し高台	御	灰白、釉・明オ リープ灰	良	底部1/ 3	
194	039-04	磁器 白磁椀	c-19	包含層	高台径 4.4	ロクロナデ、削り出し高台、施釉	密	灰白、釉・灰白	良	底部完 存	
195	045-01	土師器 茶釜		南壁	口径 14.5	外:オサエ、ナデ、ハケメ 内:ナデ	やや粗	灰黄褐、にぶい 黄橙	並	□縁部 3/4	
196		陶器 加工円盤	a-23	包含層	径 2.5 重さ4.75g		やや密	灰白、釉・黒褐	並		天目茶碗体部使用
197	050-06	土師器 加工円盤	a-23	包含層	径 3.3 重さ11.11g		やや密	浅黄橙	並		土師器体部、割れた 部分を研磨。
198		加工円盤	a-23	SD16	径 3.4 重さ12.46g		密	灰黄、釉・オリ ープ灰	良		壷体部を転用
199	050-04	加工円盤	c-27	包含層	重さ26.87g			浅黄橙	並		ロクロ土師器底部
200		土師器加 工円盤か		包含層	重さ28.60g		やや粗		良		ロクロ土師器底部
201		陶器 加 工円盤か		包含層	重さ24.15g		やや密	灰白	並		山皿底部
	009-03 045-04			SD9 包含層	径 7.0 径 8.8		<u>やや粗</u> 粗	淡黄、灰白 灰黄褐、赤灰	並		<u>溶解、変色著しい</u> 溶解、変色著しい
				SD38	正 0.0		粗	浅黄橙、にぶい橙	並		溶解、変色著しい
205	042-08			試掘	穴径 0.8			1.2			
	042-07		c-25	包含層							
207	054-01	木製品曲 物の底?	b-24	SE10	長さ20.0 厚さ1.05						
	057-01	木製品曲 物の底?	b-24	SE10	長さ21.5 厚さ0.9						
	054-04		b-24	SE10	現長10.4 厚さ0.6						先端、および一部炭 化
210	056-03	木製品 箸か?	b-24	SE10	長さ18.7 厚さ0.9						先端、および一面炭 化
	057-02		b-24	SE10	現長8.5 厚さ0.3						2 力所穿孔
_	054-03	木製品	b-24	SE10	長さ8.6 厚さ0.2						3 力所穿孔
213	054-02	木製品 楔	b-24	SE10	長さ14.7 厚さ2.0						SE10結桶の楔
	056-01	木製品 楔	b-24	SE10	長さ14.4 厚さ1.8						SE10結桶の楔
215	056-02	木製品楔	b-24	SE10	長さ12.7 厚さ1.8						SE10結桶の楔
216	047-01	木製品曲 物の底?	C-19	SZ46	厚さ0.8						黒漆が塗られる。
217		漆器 皿	c-18	SE32	口径約15 高3.0						黒漆が塗られ、赤漆 で円が描かれる
218		木製品 しゃもじ	c-18	SE32	最長24.6 厚さ0.7						
219	055-01	木製品 下駄	c-24	SK2	長さ16.3 厚さ1.4						足の痕跡明瞭(右足 ?)、先端部欠損

第9表 出土遺物観察表(6)

V 結語

今回の調査では、弥生時代後期と考えられる流路 2条、少量の弥生時代後期の遺物が出土した他、中 世の遺構、遺物を確認している。ここでは第一次調 査の報告⁽¹⁾も踏まえ、若干の考察を加えたい。

1 古代以前の宮ノ腰遺跡について

第一次調査では、遺構は確認されていないが、弥生時代前期の壺と甕が出土している。今回の調査では前期に属する遺構・遺物は見つからなかったが、後期の壺、高杯、台付甕の台が黒色土内より出土している。この黒色土はいわゆる黒ボクであり、二次的な堆積によるものである。その堆積段階にこれらの土器は流入したのであろう。宮ノ腰遺跡の下流約3kmには、前期の遺構・遺物が見つかっている中ノ庄遺跡が存在する®。中ノ庄遺跡は当遺跡の下流に位置するため、当地域周辺にさらに前期の遺跡があることが判明した。

古墳時代には、第一次調査で、古墳時代前期~後期にかけての河道跡が確認され、数多くの土器・木製品が出土している。また、中期と思われる竪穴住居も見つかっている。昨年度発掘調査が行われた上ノ庄北出遺跡においても、古墳時代中期の溝や土坑が確認されており、古墳時代の集落が当地周辺に存在していたことが明らかになった。今回の調査では古墳時代と考えられるものは、遺構・遺物ともに確認できなかった。今回の調査区では、黒色土の堆積が厚く、やや微高地化していたと思われるが、居住域として適さなかったのであろうか。

2 中世の宮ノ腰遺跡について

今回の調査では中世の遺構が多く確認されている。 これらは当地に存在した「曽袮荘」の一角と考えら れる。

曽袮荘の存在は9世紀後半から確認できるものの、 宮ノ腰遺跡ではその時期の遺構は見つかっていない。 宮ノ腰遺跡で生活の痕跡が見られるのは、12世紀中 葉の平安時代末頃からである。

宮ノ腰遺跡の第一次調査では、12世紀中~後葉頃

の溝が検出されている。第二次調査では明確にその 時期といえる遺構は確認されなかったが、包含層か ら藤澤編年⁽³⁾の第4型式と思われる陶器の小椀やロ クロ土師器が見られることから、調査区近辺に当時 の集落が存在するものと思われる。

鎌倉時代になると、今回の調査区に掘立柱建物を 中心とした集落が作られるようになる。今回の調査 区では掘立柱建物6棟、井戸、区画溝と考えられる 溝、土坑、多数のピットが確認できた。SB57・58 は隣接する同規模の掘建柱建物であり、SD44、47 はSB57、58周辺を他の集落域と区画する溝と考え られる。SD47は途中で切れており、入り口の可能 性が考えられる。この区画からは花押やその他の墨 書山茶椀が出土しており、在地領主クラスの屋敷地 であったものと思われる。また、SD19以南には中 世の遺構はまったく見られず、第一次調査でも北部 には中世の遺構が見られないことから、当時の集落 の南端を示す溝と考えられる。上ノ庄北出遺跡でも、 宮ノ腰遺跡により近いA地区において、鎌倉時代の 掘立柱建物と井戸、溝が見つかっており、当時の集 落域が広がっていたことがわかる。上ノ庄北出遺跡 ではA地区の南半分では集落が、B地区の北側では 墓域が営まれており、A地区南部が当時の集落の北 端にあたるものと思われる。

鎌倉時代の終わり頃~室町時代前期(14世紀前葉~15世紀中葉)にかけては、井戸や溝等の遺構が見られる。14世紀中葉~後葉と思われる土師器皿4枚が出土したピットが調査区の西端で見つかっていることから、当時期の集落が西に広がる可能性もある。

室町時代〜戦国時代になると、第一次調査の南東部でも集落が営まれるようになる。掘立柱建物は確認されてないものの、15世紀中葉〜16世紀前葉の井戸や溝・土坑と、根石を持った多数のピットが確認されている。今回の調査では井戸、区画溝の可能性を持つ溝、根石を持つピットが見つかっており、調査区内及び調査区の近辺で集落が営まれていたと思われる。上ノ庄北出遺跡では当時期の遺構が明確でないことから、集落の中心が調査区の南、あるい

は西で形成されたものと思われる。

今回の発掘調査によって、少なくとも鎌倉時代の 初め頃には当遺跡に曾袮荘の荘官クラスの屋敷地が 存在したことが明らかになった。しかし、曽袮荘に 関わるような発掘調査は前年度の1次調査、今年度 の調査、上ノ庄北出遺跡の調査が行われたのみであ り、その全貌は不明な点が多い。今後当遺跡周辺の 発掘調査により、より鮮明に曾袮荘の実体も明らか になってくるであろう。

3 墨書山茶椀について

今回の調査ではの墨書された山茶椀・山皿が出土している。内訳は花押4点、文字4点(「まつ」2点、「阿加」1点、「井」1点)、記号6点(「×」、「()、「〇」)、判読できないもの10点がある。判読できないものの中にも花押と思われるものが数点存在している。墨書山茶椀は藤沢編年5~6型式のものに限定され、12世紀末~13世紀前葉のものと考えられる。墨書された部位は底部外面のものがほとんどで、内面見込み部に墨痕の見られる山茶椀1例、内面に「阿加」と書かれた山皿1例がある。

墨書山茶椀については、小林秀氏が整理と類型化 を試みている⁽⁴⁾。それを参考にし、若干の考察を行 いたい。

今回出土した墨書山茶椀は限定されたところからしか出土していない。SE10、SD47・50というSB57・58を中心とする屋敷地内からの出土である。居住者が一括して所有していたのであろうか。特に花押の墨書された山茶椀が多いという状況から、この屋敷の居住者が、花押を使用していた在地領主クラスの権力者であったと考えられる。

なぜ山茶椀に墨書をしたのであろうか。山茶椀は 伊勢を含む東海地方における中世の遺跡からは一般 的に見られる遺物である。量もかなりの数が見られ、 あえて個人の私有を示すような遺物とは考えられな い。しかし、墨書という行為は明らかに他の山茶椀 との区別をするためのものであり、そこには当然何 らかの意味があるのであろう。

花押が墨書されている山茶椀の県内での出土例は、 津市六大A遺跡[®]4点、宮ノ前遺跡[®]2点、安濃津遺 跡群[®]、川北城[®]、亀山市山城遺跡[®]、玉城町蚊山遺 跡左郡地区[∞]等がある。六大A遺跡は摂関家領窪田 荘、蚊山遺跡は伊勢神宮との関係が考えられている 遺跡である。

同じ文字、記号が同じ遺跡から出土する例もいく つかある。岸田早苗氏はこうした状況を、「記述し てある文字は、そのものの意味を持つものではなく」、 「一単位集団を表す記号として使用される」のでは ないかとしている¹⁰。

小林秀氏はこのような花押や記号の書かれた墨書 山茶椀が「ます」として使用された可能性を示唆し ている。山茶椀は耐久性が高く、比較的同一の法量 をもつ。曽祢庄に住む集団が、税を納める際の共通 の単位を示すものとして使用したのであろうか。し かし今回の調査での出土が、溝から一括投棄された ような状態で見つかっている例、井戸から見つかっ ている例があることから、何らかの祭祀的意味合い を持つ可能性も否定できない。

当遺跡からはその他文字の墨書されたものも存在する。「まつ」は2点見つかっているが、人名あるいは地名を表すものと思われる。「阿加」は明確にはいえないものの「悶伽(あか)」の意味を持つ可能性が考えられる¹²。悶伽棚に水を捧げるのに用いられたのであろうか。この文字は山皿の内面に書かれており、そのような例はあまり見られない。それ自体に何か意味があるのか、今後の類例の増加を待ちたい。

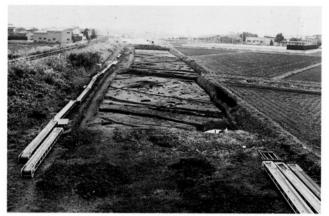
4 SE10について

SE10は、北東調査区のほぼ中央、SB57、58の東に位置する遺構である。底近くから花押の墨書された山茶椀が完形で出土しており、13世紀前葉の遺構と考えられる。

この井戸は、井戸枠として結桶を使用していた。 結桶を使用した井戸は九州太宰府において12世紀と 考えられるものが見つかっているが、一般化するの は鎌倉時代後半になってからである⁶³。九州以外で は15世紀以降の検出例がほとんどであり、三重県 では15世紀前半のものが安濃津遺跡群で見つかっ ている⁶⁴もののそれ以前の出土例は見あたらない。 今回の例は全国的にも非常に古い例といえよう。宮 ノ腰遺跡は曽袮荘の在地領主クラスの居住地であっ たと考えられるが、特別な権力を持った居住者であったとは考えにくい。桶などの木製品は腐朽により消失すること、井戸枠は廃棄の際に抜き取る事例があることなどから、今後類例の増える可能性はあるであろう。しかし、宮ノ腰遺跡でこのような井戸が見つかったことは、曽袮荘の性格を考える上で重要な意味を持つものと思われる。今後このような例の増加により、意味するものがより明確になってくるであろう。

註

- (1) 伊藤裕偉『宮ノ腰遺跡発掘調査報告 I』 (三重県 埋蔵文化財センター 1996年)
- (2) 谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』(三重県教育委員会 1972年)
- (3) 藤沢良祐「山茶碗研究の現状と課題」(『研究紀 要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994年)
- (4) 小林秀「中世における三重出土の墨書土器について」(三重歴史文化研究会発表資料 1997年)
- (5) 「六大A遺跡」(『一般国道23号中勢道路埋蔵文 化財発掘調査概報IV』三重県埋蔵文化財センター 1995年)
- (6) 本堂弘之ほか「宮ノ前遺跡」(一般国道23号線中 勢道路建設事業に伴う大古曽遺跡・山篭遺跡・宮 ノ前遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1995年)
- (7) 伊藤裕偉『安濃津』(三重県埋蔵文化財センター 1997年)
- (8) 萱室康光『川北城跡発掘調査概報(第1次調査)』 (津市教育委員会 1981年)
- (9) 山田猛、岸田早苗「山城遺跡」(『山城遺跡・北 瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1994年)
- (1) 前川嘉宏『蚊山遺跡左郡地区』(近畿自動車道 (勢和〜伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告第5分冊』 三重県埋蔵文化財センター 1993年)
- (11) 前掲(9)に同じ
- (12) 斎宮歴史博物館榎村寛之氏の御教示による。
- (3) 石村真一『桶·樽I』(法政大学出版局 1998年)
- (4) 前掲(7)に同じ



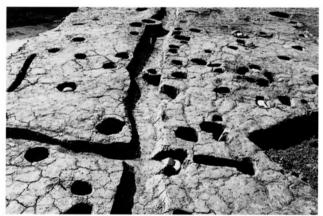
調査区全景(北西から)



調査区全景 (南東から)



SB57・58 (北から)



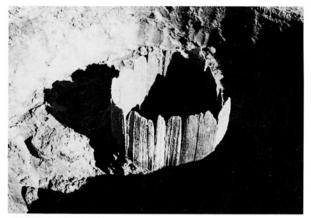
SB60・61 (東から)



SD50 作業風景(西から)



SD50 土器出土状況 (西から)



SE10(1) (西から)



SE10(2) (西から)



SE10(3) (西から)



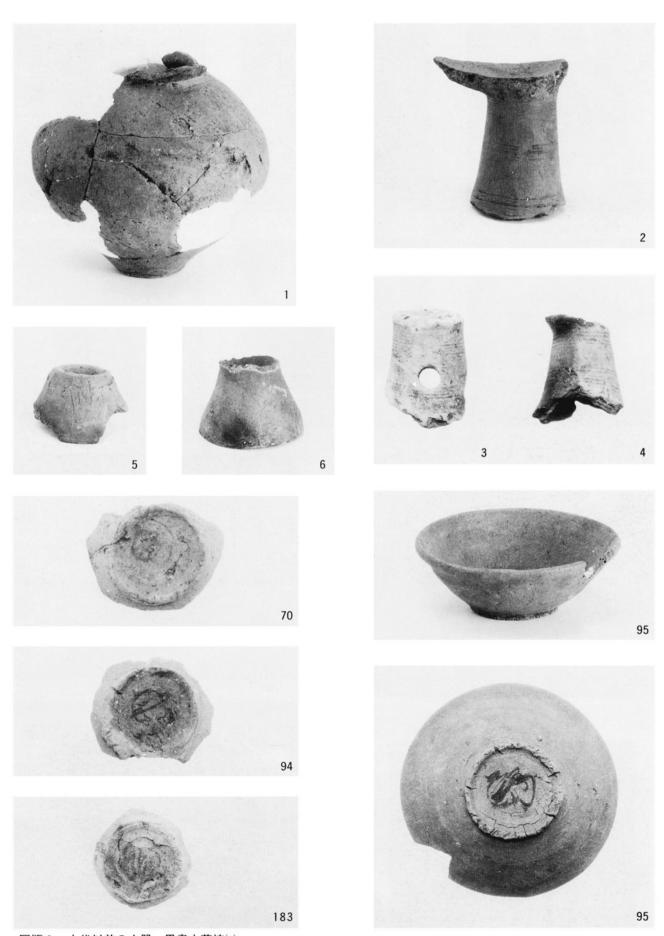
SE10(4) (西から)



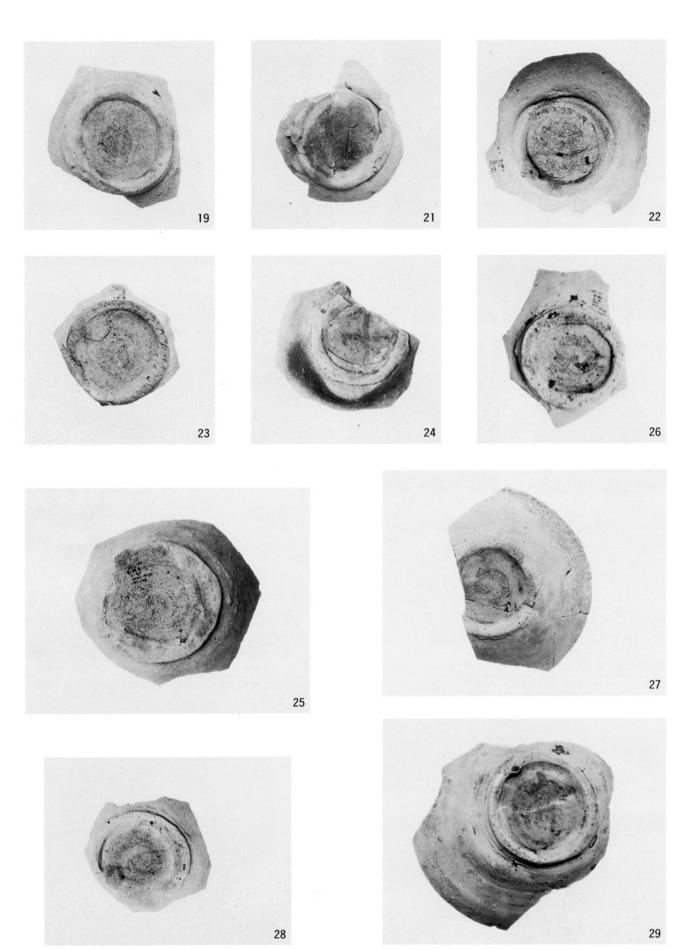
SK51(1) (北から)



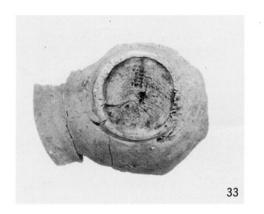
SK51(2) (北から)

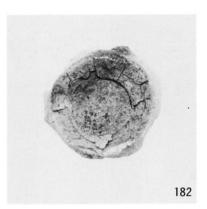


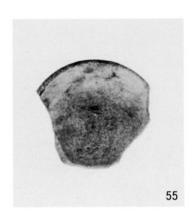
図版 3 古代以前の土器、墨書山茶椀(1)



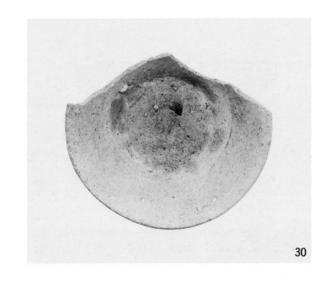
図版 4 墨書山茶椀(2)



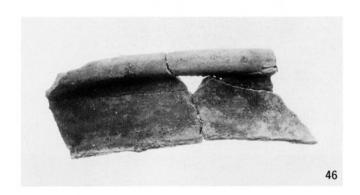








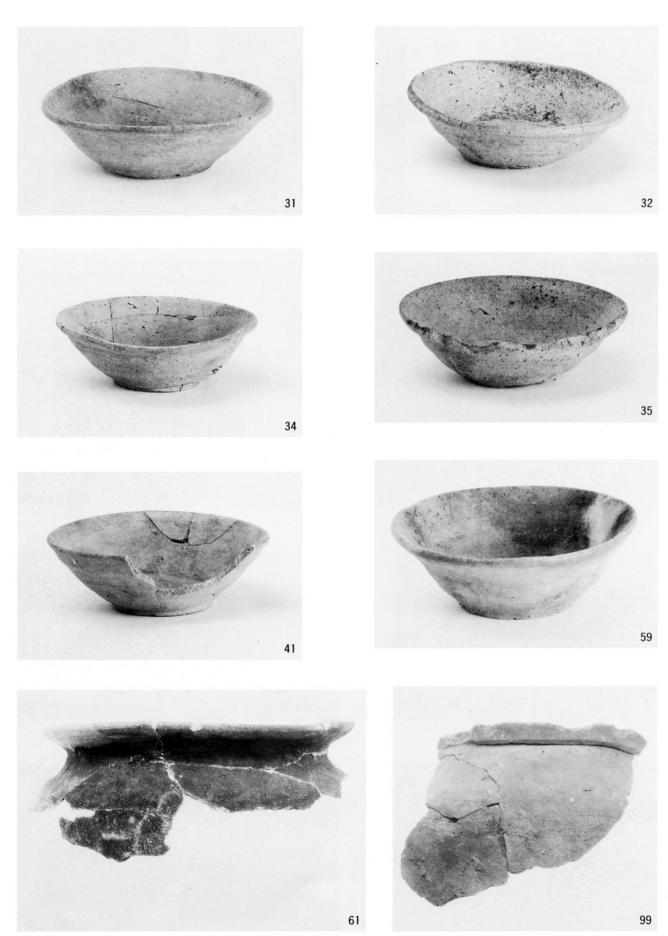




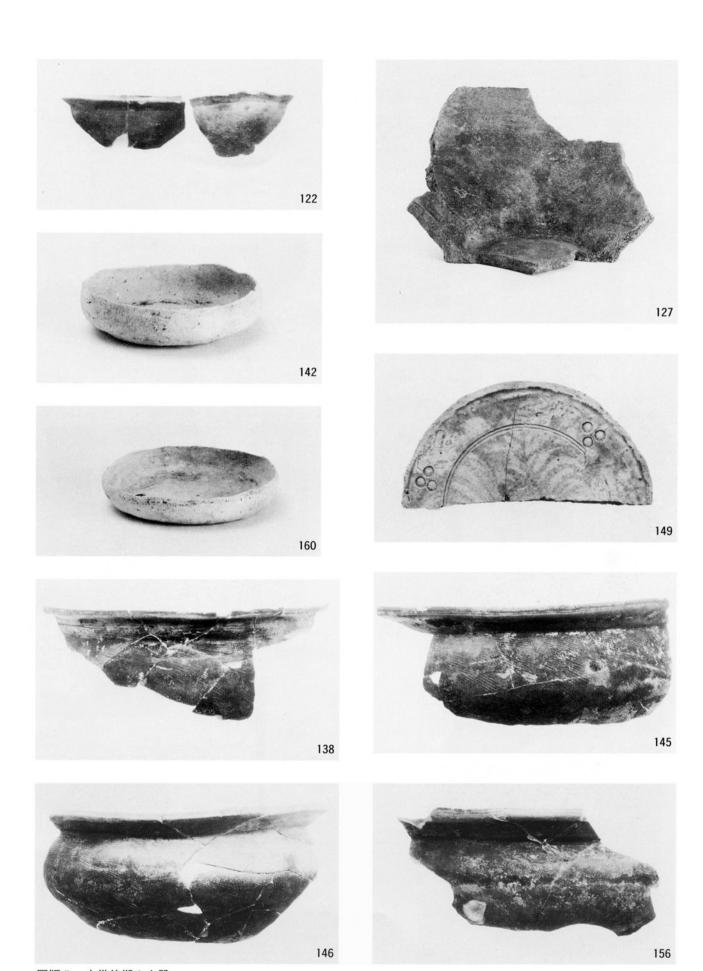




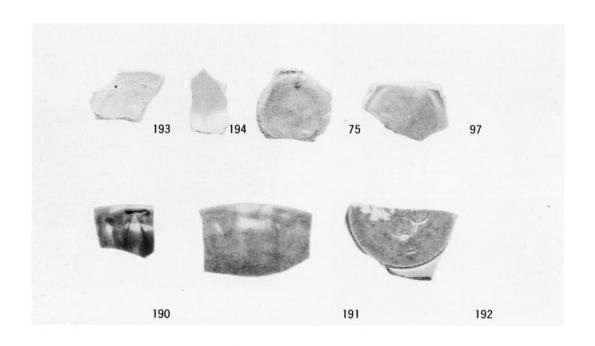
図版 5 墨書山茶椀(3)、中世前期の土器(SD50)

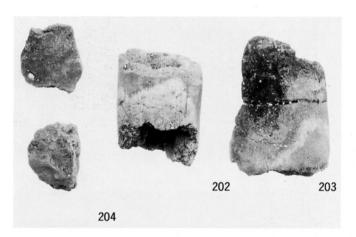


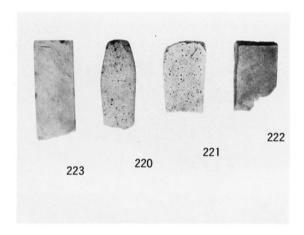
図版 6 中世前期の土器

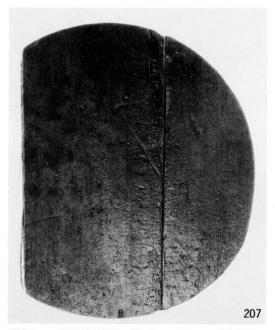


図版7 中世後期の土器

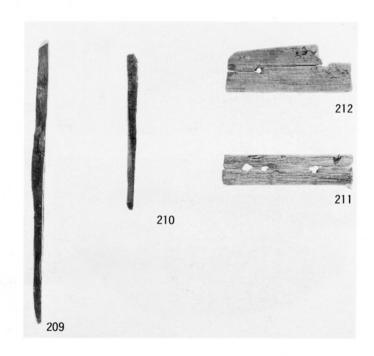


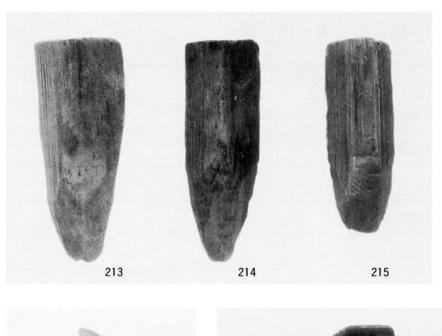


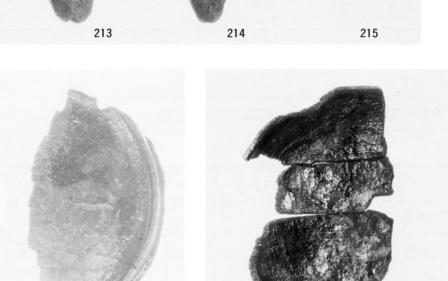






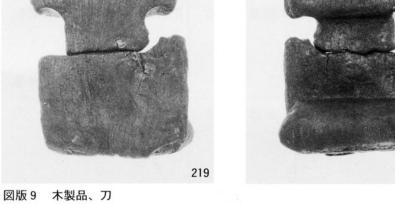














報告書抄録

ふりがな	みやのとし	ハサきけ・	くつちょう	ナほろっ	9										
	みやのこしいせきはっくつちょうさほうこく 2														
書名	宮ノ腰遺跡3	発掘調査報行 	吉 II ————												
副書名	一志郡三雲	一志郡三雲町上ノ庄所在遺跡の調査 													
巻 次															
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告														
シリーズ番号	178														
編著者名	水谷 豊														
編集機関	三重県埋蔵文化財センター														
所 在 地	〒514-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596(52)1732														
発行年月日															
ふりがな	: ふりが	なコ	— ř	北緯	東 経	1. 119 141									
所収遺跡名	所 在	地市町村	遺跡番号	0, "	0 / //	調査期間	引 調査面積㎡	調査原因							
タヤのこしいせき 宮ノ腰遺跡	**	ノ庄	7 15	34度 35分 43秒	136度 30分 00秒	1997.9.1 ~12.1		平成9年度 9年度 9年度 2 9年度 2 2 2 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3							
所収遺跡名宮ノ腰遺跡		主な時代 弥生後期 中世前期 中世後期	主 流路 掘立柱建 井戸・土抗 井戸・ト		・高土師器	• 陶器	結桶の井戸								

平成 11 (1999) 年 3 月に刊行されたものをもとに 平成 19 (2007) 年 9 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告178

宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ⅱ

--志郡三雲町上ノ庄所在遺跡の調査-

1999 • 3

編集 発行 三重県埋蔵文化財センター 印刷 衛第一プリント社